

クラスタ化した SigmaSystemCenter における SigmaSystemCenter/電源管理基本パックの設定 (iStorage 連携あり)

本ドキュメントは SigmaSystemCenter（以降、「SSC」と省略します）の管理サーバを CLUSTERPRO によりクラスタ化したシステムにおいて、SigmaSystemCenter/電源管理基本パック（以降、「SSC/電源管理基本パック」と省略します）を使用して電源管理/自動運転を行う際に必要な設定手順を説明した資料です。

iStorage 連携機能を利用する場合は、本ドキュメントを参照してください。

iStorage 連携機能について

iStorage S/D/M シリーズ（以降、iStorage と省略します）の共有ディスクを利用するシステムの場合、iStorage の電源供給を切断する際には、電源切断の前に iStorage のフラッシュ処理を実行し、ディスクへの書き込み処理を完了させておく必要があります。本処理が行われない iStorage はディスクの安全性が保障されません。

SSC/電源管理基本パックの iStorage 連携機能を利用する場合、iStorage を利用するサーバ（「連動端末」）のアクセスが停止した後に iStorage 装置へフラッシュ要求を行います。これにより、iStorage の電源供給切断前にキャッシュデータのディスクへの書き込み処理が実施可能です。ただし、キャッシュフラッシュ要求を出す側である SSC/電源管理基本パックの「制御端末」はキャッシュフラッシュが完了するまで稼動し続けておく必要があります。そのため、制御端末を接続する UPS については、長時間のバッテリー運転が可能な UPS を準備する必要があります。（停電発生からシャットダウンまでの一連の動作例は、「7.11 iStorage 連携機能を使用した電源管理/自動運転について」にて説明しておりますのでそちらを参照してください。）

本ドキュメントは、クラスタ化した環境にて使用する際、SSC/電源管理基本パックのセットアップカードに記載済みの操作手順については詳細を省略しているため、セットアップカードも予めお手元にご用意ください。

■■ SSC/電源管理基本パックのクラスタ化対応バージョンについて ■■

SSCの管理サーバをクラスタ化したシステムにてSSC/電源管理基本パックを使用する場合、クラスタ化に対応したバージョンのSSC/電源管理基本パックを使用してください。

- SSC 2.1以降の管理サーバ :SSC/電源管理基本パック Ver.2.1
- SSC 1.3の管理サーバ : SSC/電源管理基本パック Ver.1.02以降

1 機能概要

CLUSTERPROを使用してSSCの管理サーバをクラスタ化したシステムにおいて、SSC/電源管理基本パックを使用する場合、SSC/電源管理基本パックにおいて特別な設定手順が必要となります。

以降で説明する手順に従ってセットアップを行うことで、SSC/電源管理基本パックが提供する電源管理/自動運転の機能をクラスタ化した環境においても使用可能になります。

SigmaSystemCenter/電源管理基本パックは、AC Management Console（以下「AMC」と

省略します) 機能を使用して、Smart-UPS相当無停電電源装置にSNMPカードを実装した環境で、CLUSTERPROによるクラスタを構成するサーバ全体の自動運転機能を提供します。

AMC機能を使用することで、クラスタを構成する全てのサーバを自動的に同期させた電源制御が実現できます。

SSCの管理対象サーバのみが使用するiStorage S/D/Mシリーズの共有ディスクについては、iStorage装置の電源切断を行う前にiStorageのキャッシュデータの書き込み処理を行う「iStorage連携機能」を利用することができます。

※ iStorage連携機能に関する注意

- SSCの管理サーバが使用するiStorage S/D/Mシリーズの共有ディスクについては、「iStorage連携機能」を利用することができませんので、ご注意ください。
- 使用するSSC/電源管理基本パックのバージョンによって、iStorage連携可能なシステム数が異なります。

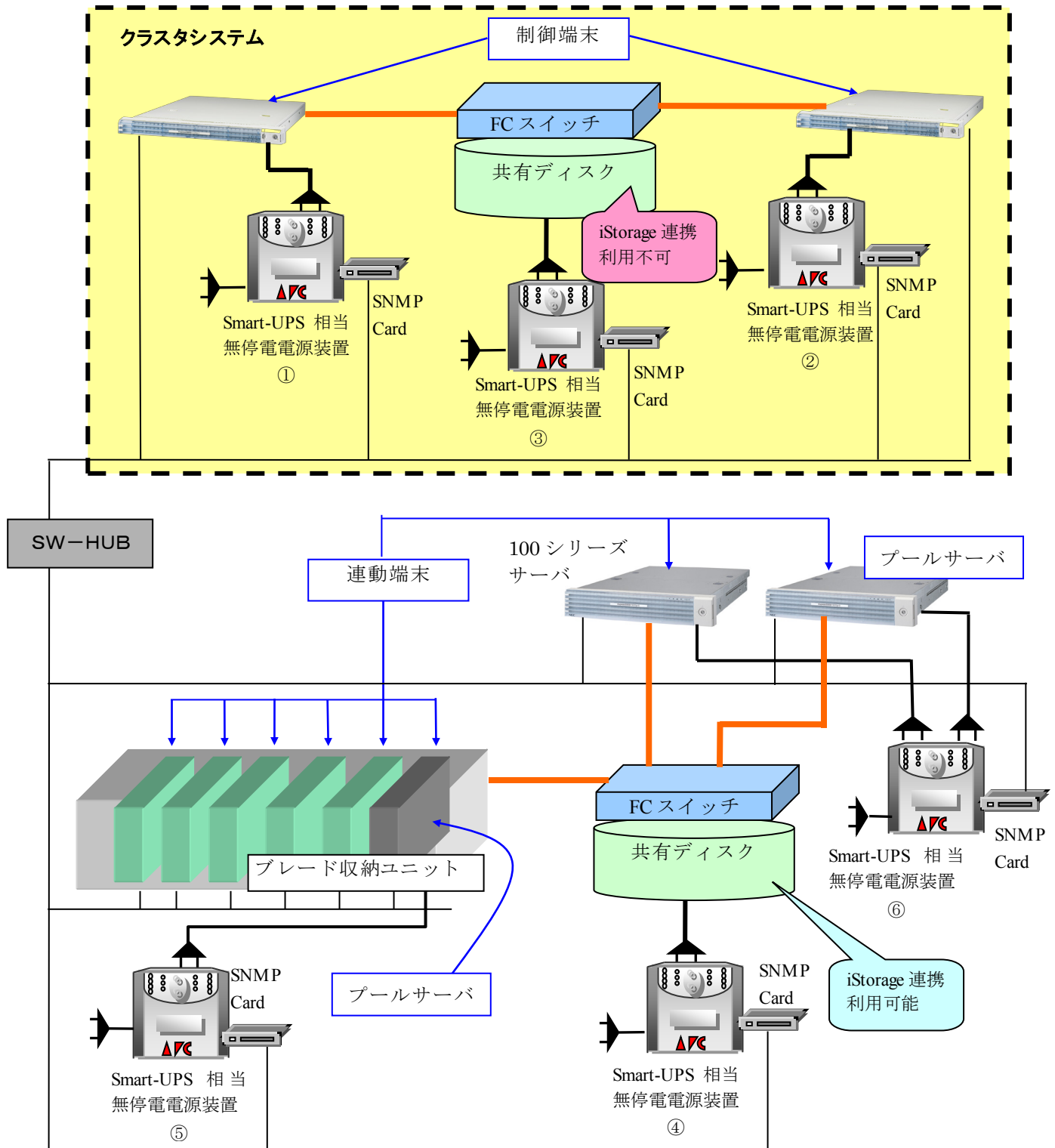
＜SSC/電源管理基本パック Ver.2.1の場合＞

最大10システムのiStorageシステムを管理することができます。

＜SSC/電源管理基本パック Ver.1.02の場合＞

1つのシステムのみです。複数個のiStorageシステムを管理することはできません。

以下のシステムを例に、SSCの管理サーバをクラスタ化したシステム構成の設定方法について説明いたします。



2 機能範囲

CLUSTERPROによるクラスタ環境において以下の機能を提供します。

クラスタサーバ全体を連動した自動電源投入・切断

□ **運転スケジュールによるクラスタサーバ全体の電源投入・切断**

SSC/電源管理基本パックの GUI で運転スケジュールを作成し、監視要因を設定すると、クラスタを構成する全てのサーバに同じスケジュールが設定され、定刻に全てのサーバが同期して電源投入し起動、定刻にクラスタシャットダウンを実行し電源停止、が可能です。

□ **各種電源投入・切断の要因の組み合わせ**

クラスタ環境においても、単体のサーバ自動運転の場合と同様に、スケジュールで投入して、スケジュールと LAN で監視して切断など、各種の要因を組み合わせで運用条件を設定することができます。

停電時のクラスタの自動停止・再開

UPS のバッテリー容量が十分な場合、共有ディスクなどクラスタの基幹機器の停電や、全てのサーバでの停電の際には、クラスタシャットダウンを行い停電復旧後に自動的にクラスタシステムを再起動するといった作業を、自動で実行させる事ができます。

電源切断 API によるアプリケーションからのクラスタサーバの停止機能

SSC/電源管理基本パックにて従来から提供している電源切断 API で、クラスタシャットダウン・電源切断が実現できます。これにより、ユーザアプリケーションでクラスタのシステム停止および UPS の出力停止が行えます。

電源投入・切断時のサーバごとのジョブ起動

SSC/電源管理基本パックの提供する起動時の登録ジョブ起動・切断時の登録ジョブ起動は、クラスタシステムにおいても有効です。

なお、切断時の登録ジョブは、それぞれのサーバでクラスタのシステム停止が行われた後で起動されます。

クラスタマネージャとの連携

クラスタマネージャにて、クラスタシャットダウンやサーバシャットダウンを指示すると、SSC/電源管理基本パックと連動したシャットダウン／リブートを行うことができます。サーバのシャットダウン操作を行った場合は、シャットダウン後、UPS の出力停止まで行われます。

クラスタに接続される UPS の統計情報を一括して管理端末で集計

クラスタの各装置の電源を保護する UPS の稼動状況を、管理端末で一括して監視し、各 UPS の統計情報として集計・記録（1 週間分）します。

***iStorage* 連携機能の利用**

SSC/電源管理基本パックの制御による停電／自動運転のシャットダウンの際、SSCの管理サーバが SSC の管理対象サーバのみが使用する iStorage 装置 をオフする前に、iStorage のキャッシュフラッシュを実施します。

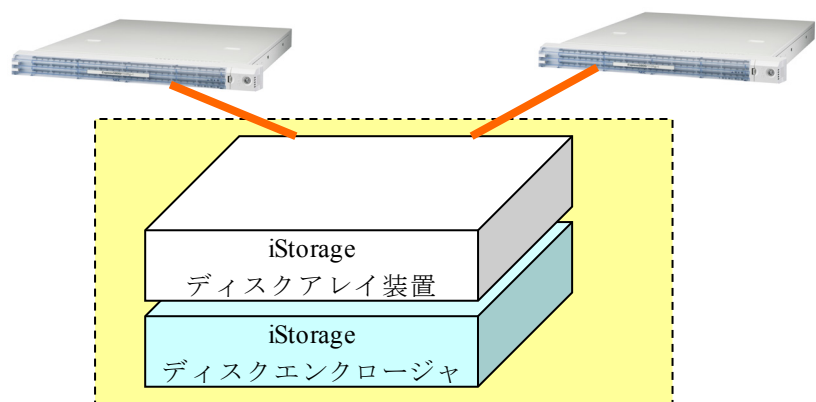
※ 注意

- この機能は SSC の管理サーバが使用する共有ディスクに対しては利用できません
- 使用する SSC/電源管理基本パックのバージョンによって、iStorage 連携可能なシステム数が異なります。

＜iStorage が 1 システム＞

SSC/電源管理基本パック Ver.2.1 : ○

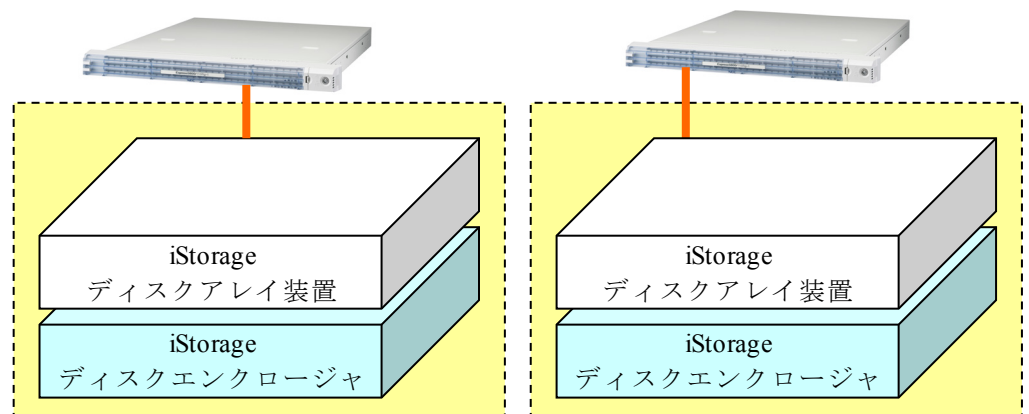
SSC/電源管理基本パック Ver.1.0 : ○



＜iStorage が 2 システム～10 システム＞

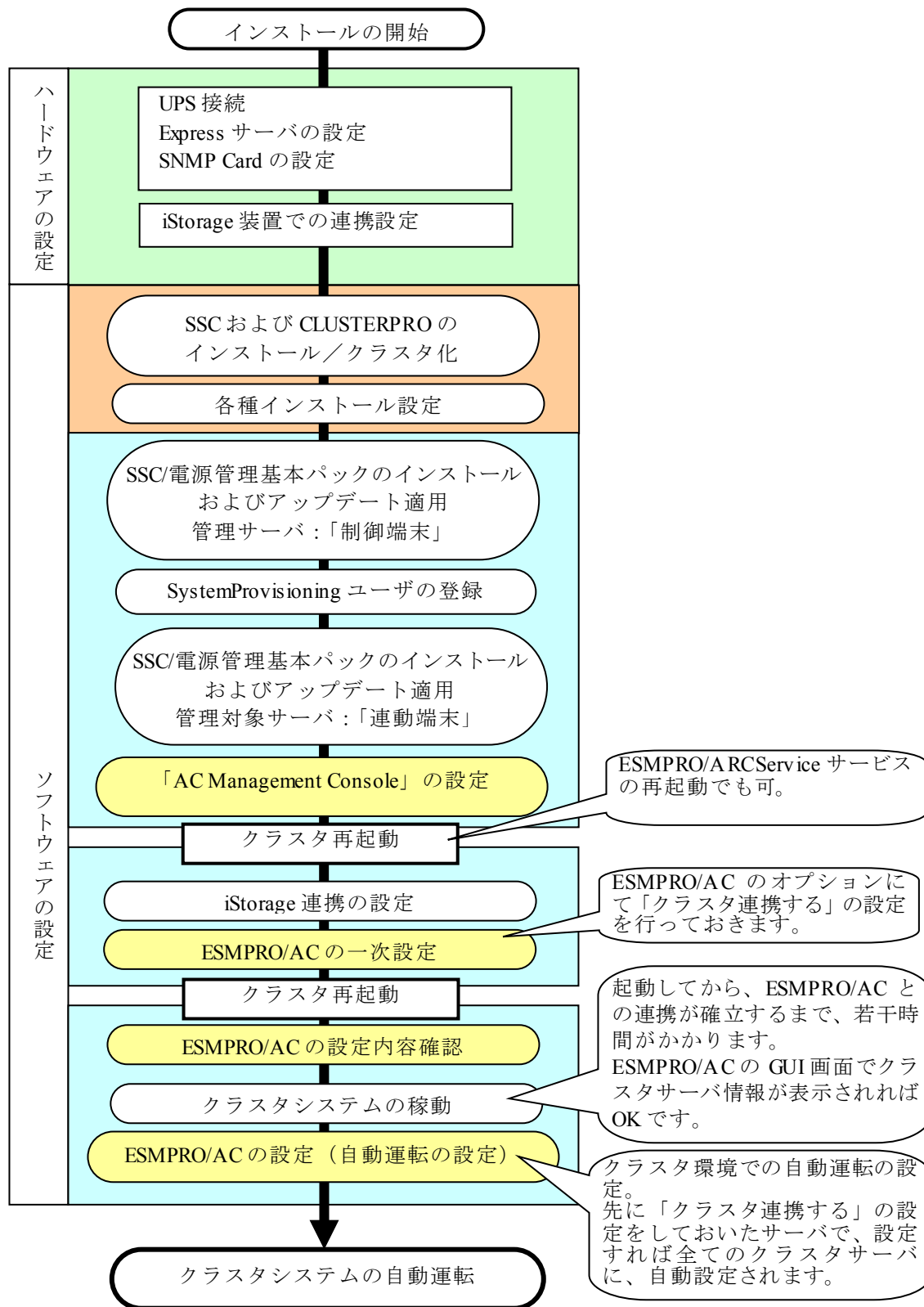
SSC/電源管理基本パック Ver.2.1 : ○

SSC/電源管理基本パック Ver.1.0 : ×



3 インストール手順

以下、SSCをクラスタ化した環境でSSC/電源管理基本パックを使用するための手順を示します。



4 ハードウェアの設定

各装置を UPS に接続し、サーバ装置については BIOS の AC-Link 設定を実施しておいてください。(BIOS 設定の詳細については、各サーバ装置に添付のマニュアルを参照してください。)

SNMP カードについては、SSC/電源管理基本パックのセットアップカード「3.1 SNMP カードの設定」を参照して設定を行ってください。

※重要

SSC/電源管理基本パックの iStorage 連携機能を使用する場合、SSC/電源管理基本パックのサービスが iStorage 装置へアクセスするための連携設定が、iStorage 装置側で別途必要になります。iStorage 装置側での連携設定の方法については iStorage 装置関連のドキュメントを参照してください。

5 SSC/電源管理基本パックのインストール/アップデート適用

クラスタ化完了後の SSC 環境の各サーバにインストールする SSC/電源管理基本パックはそれぞれ以下です。

SSC 管理サーバ：制御端末

管理対象サーバ：連動端末

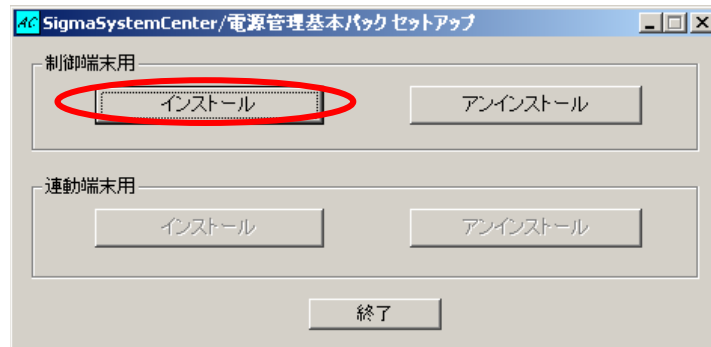
5.1 制御端末のインストール/アップデート適用

クラスタ化した SSC 管理サーバに SSC/電源管理基本パックの制御端末をインストールする場合、セットアップカード「3.4.1 制御端末の手動インストール手順」に記載したものと手順が異なります。

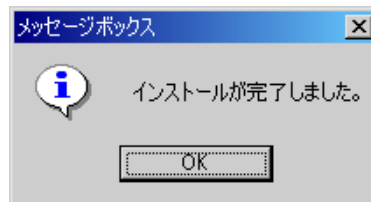
SSC/電源管理基本パックの制御端末は、以下の手順でインストールおよびアップデート適用を行ってください。

- (1) 制御端末に管理者権限でログインし、ラベルに「SigmaSystemCenter/電源管理基本パック」と記載されている CD-ROM を制御端末とするサーバの CD-ROM ドライブにセットします。
- (2) エクスプローラを起動し、CD-ROM ドライブ配下にある「ESMARC」フォルダ下の「SetupMain.exe」を起動します。

- (3) 下記画面が表示されますので、「インストール」ボタンを押すと直ちにインストールが開始されます。
(下記は SSC/電源管理基本パック Ver.2.1 の画面です。)



- (4) インストールが完了すると以下のメッセージが表示されます。



- (5) SSC 電源基本パックの最新アップデートの適用を実施してください。

以下の(6)～(8)までは、SSC のバージョンが 3.0 以降の場合にのみ実施してください。SSC のバージョンについては、SSC の SystemProvisioning Web Console から運用メニューを開き、管理->ライセンスより、エディション情報を確認してください

- (6) アップデート適用後、サービス画面から[ESMPRO/ARC Service]を停止します。

- (7) SSC をインストールした環境から、PVM -> opt -> esmproac フォルダ配下にある ac_pvm_u3.exe を制御端末用ソフトウェアのインストールしたフォルダに上書きコピーします。
既に同じモジュールが存在していますが、上書きコピーしてください。

例) SSC が C:\Program Files (x86)\NEC 配下にインストールされており、制御端末用ソフトウェアが C:\Program Files (x86)\AUTORC 配下にインストールされている場合

C:\Program Files (x86)\NEC\PVM\opt\esmproac\ac_pvm_u3.exe



C:\Program Files (x86)\AUTORC\ac_pvm_u3.exe

に上書きコピー

- (8) 制御端末用ソフトウェアのインストールフォルダ上で、ac_pvm_u3.exe を ac_pvm.exe に上書きコピーします。既に同じモジュールが存在していますが、上書きコピーしてください

C:\Program Files (x86)\AUTORC\ac_pvm_u3.exe



C:\Program Files (x86)\AUTORC\ac_pvm.exe

に上書きコピー

- (9) スタートメニューから [ESMPRO_AutomaticRunningController] → [SigmaSystemCenter_電源管理基本パックバージョン] を選択してください。以下のように製品情報が記載されたテキストファイルのウィンドウが表示されます。
[バージョン]に記載されている情報が、制御端末にインストールされている製品のバージョンです。

製品情報

[型番] : UL1282-201

[製品名] : SigmaSystemCenter/電源管理基本パック

[バージョン] : 2.10

クラスタ化したノードの全てについて、SSC/電源管理基本パックの「制御端末」インストールおよびアップデート適用が完了したら「5.2 SystemProvisioning ユーザの登録」に進んでください。

5.2 SystemProvisioning ユーザの登録

- (1) SSC の SystemProvisioning ユーザの登録を行います。詳細については SSC のマニュアルを参照してください。
 - ＜SSC 2.1以降を使用している場合＞
SigmaSystemCenter Web Console へ、管理者権限でログイン
 - ＜SSC 1.3を使用している場合＞
現用系のクラスタノードにおいて、[SystemProvisioning] → [運用管理ツール] を起動します。
- (2) SSC/電源管理基本パックがSSCと通信するためのユーザ情報を設定します。
 - ＜SSC 2.1以降を使用している場合＞
「管理」→「ユーザ」を選択し、SSC/電源管理基本パックが使用するためのユーザとして「ac_user」を追加し、任意のパスワードを設定してください。
なお、「ac_user」の権限レベルには、「Administrator」を指定してください。
 - ＜SSC 1.3を使用している場合＞
「運用管理ツール」のメニュー[操作] → [ユーザ管理]を選択して「ユーザ管理」画面を表示し、以下のユーザ、権限、パスワードを設定してください。
ユーザ : ac_user(全て小文字です)
権限 : 管理者
パスワード : ac_passwd(全て小文字です)
- (3) クラスタ化した管理サーバのすべてのノードにおいて「メモ帳」を起動し、SSC/電源管理基本パックのインストールフォルダにある「ac_pvm.exe.config」ファイルを表示します。本ファイルにはnet.tcp://localhostという記述箇所がありますので、localhostの箇所をクラスタのフローティングIPへ変更します。

※SSC/電源管理基本パックのデフォルトインストールパスはバージョンによって異なります。

- Ver.2.1 : %SystemDrive%\Program Files (x86)\AUTORC
- Ver.1.0 : %SystemDrive%\AUTORC

(例) フローティングIPが172.16.1.48の場合、以下のように変更します。

"net.tcp://localhost:26102/UniversalConnectorServer"
↓
"net.tcp://172.16.1.48:26102/UniversalConnectorServer"

- (4) クラスタ化した管理サーバのすべてのノードにてコマンドプロンプトから「ac_pvm.exe」を実行し、アカウント、パスワードの設定確認を行います。「ac_pvm.exe」の実行方法はSSC/電源管理基本パックのバージョンによって異なります。

＜SSC/電源管理基本パック Ver.2.1の場合＞

SSC/電源管理基本パックの制御端末用ソフトウェアをインストールしたフォルダ下にある「ac_pvm.exe」を、下記パラメータを指定して実行してください。

C:\Program Files (x86)\AUTORC\ac_pvm.exe -p ac_userpassword

※passwordには、(2)の手順にて作成したac_userのパスワードを指定します。

(例) 「ac_user」アカウントのパスワードを「ac_passwd」と設定した場合

C:\Program Files (x86)\AUTORC> ac_pvm.exe -p ac_userac_passwd

・・・(途中 省略)・・・

SystemProvisioning のアカウント、パスワードを保存しました。

SystemProvisioning でアカウント情報を変更した場合は再度本コマンドで登録願います。

Return Value : 0

＜SSC/電源管理基本パック Ver.1.0の場合＞

SSC/電源管理基本パックの制御端末用ソフトウェアをインストールしたフォルダ下にある「ac_pvm.exe」を、オプション指定をせずに実行してください。

C:\AUTORC\ac_pvm.exe

・・・(途中 省略)・・・

アカウント ac_user でアクセスします

Success - SystemProvisioning へアクセスが確認できました。

Return Value : 0

すべてのノードにおいて「ac_pvm.exe」コマンドの出力結果が「Return Value : 0」と表示されましたら、アカウント、パスワードおよびフローティングIPアドレスが正しく設定されていることになります。

- (5) SSC/電源管理基本パック Ver.2.1の場合、SSCのクラスタ環境で使用するためには「ESMPRO/ARC Service」サービスにログオンアカウントの設定を行う必要があります。

※SSC/電源管理基本パック Ver.1.0の場合、下記手順は不要です。「5.3 連動端末のインストール/アップデート適用」に進んでください。

1. [管理ツール]→[サービス]を起動し、「ESMPRO/ARC Service」プロパティを表示してください。「ESMPRO/ARC Serviceのプロパティ」画面が表示されます。

2. "ログオン"タブを選択して表示される画面において、「アカウント」を選択してください。「アカウント」、「パスワード」の設定も行ってください。
- アカウント：アカウント情報に"Administrator"の情報を入力してください。
※Administratorのアカウント情報は、「参照」ボタンを選択して表示される『ユーザーの選択画面』にて、"Administrator"を入力後「名前の確認」ボタンを押し、「OK」ボタンを押して入力してください。
 - パスワード：「ログオン」アカウントのパスワード情報を入力してください。

ユーザー アカウントのログオン オプションの構成の詳細を表示します
以下のハードウェア プロファイルに対しこのサービスを有効または無効にできます(Y):

ハードウェア プロファイル	サービス
Undocked Profile	有効

ハードウェア プロファイルを使ってトラブルシューティングを行います

OK キャンセル 適用(A)

以上で、SystemProvisioning ユーザ登録作業は終了です。「5.3 連動端末のインストール/アップデート適用」に進んでください。

5.3 連動端末のインストール/アップデート適用

SSC/電源管理基本パックの連動端末インストール手順については、SSC/電源管理基本パックのセットアップカード「3.4.2 連動端末の手動インストール手順」を参照してインストールを行ってください。

インストール後に連動端末のバージョン確認を行ってください。

バージョン確認方法を以下に示します。

<連動端末(Windows)>

連動端末にログインし、SSC/電源管理基本パックの連動端末をインストールしたフォルダをエクスプローラ等で開き、フォルダ内の「Version.txt」をメモ帳等のテキストエディタで開いてください。

以下のように製品情報が記載されたテキストファイルのウィンドウが表示されます。

[バージョン]に記載されている情報が、連動端末(Windows)にインストールされている製品のバージョンです。

製品情報

```
=====
[型番]       : UL1282-201
[製品名]     : SigmaSystemCenter/電源管理基本パック
[バージョン] : 2.10
=====
```

<連動端末(Linux)>

以下のコマンドを root 権限で順に実行してください。

```
# cd /usr/local/AUTORC/data
```

```
# cat .reginfo_euc.ini | grep PackKind003Ver
```

または

```
# cat .reginfo_utf8.ini | grep PackKind003Ver
```

上記 cat コマンドの実行結果で表示される情報が製品のバージョン情報です。

(例) # cat .reginfo_euc.ini | grep PackKind003Ver

```
PackKind003Ver=2.10
```

6 「AC Management Console」の設定

SSC/電源管理基本パックを全てのサーバにインストール後、AC Management Consoleにてクラスタ化したSigmaSystemCenterの電源管理を実施するための設定をします。

本設定は、クラスタを構成するいずれか1つの制御端末でのみ行います。

(以降では「1 機能概要」に記載のシステム構成を例として説明いたします。)

6.1 電源制御グループの作成

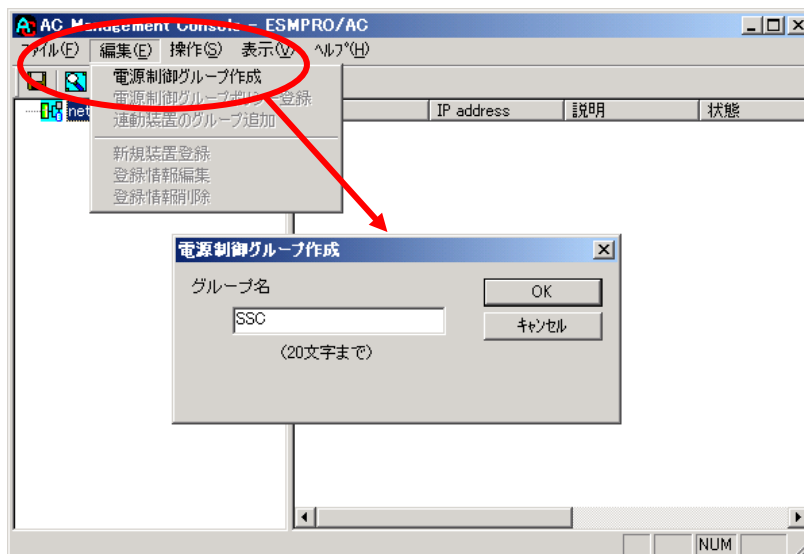
- (1) スタートメニューから [ESMPRO_AutomaticRunningController] → [AC Management Console]を選択してAC Management Console（以下AMCと省略）を起動します。

※SSC/電源管理基本パックのライセンスキー情報が未入力の場合、以下の画面が表示されますので、製品添付の「ソフトウェアライセンスキー」に記載されているキーを入力してください。

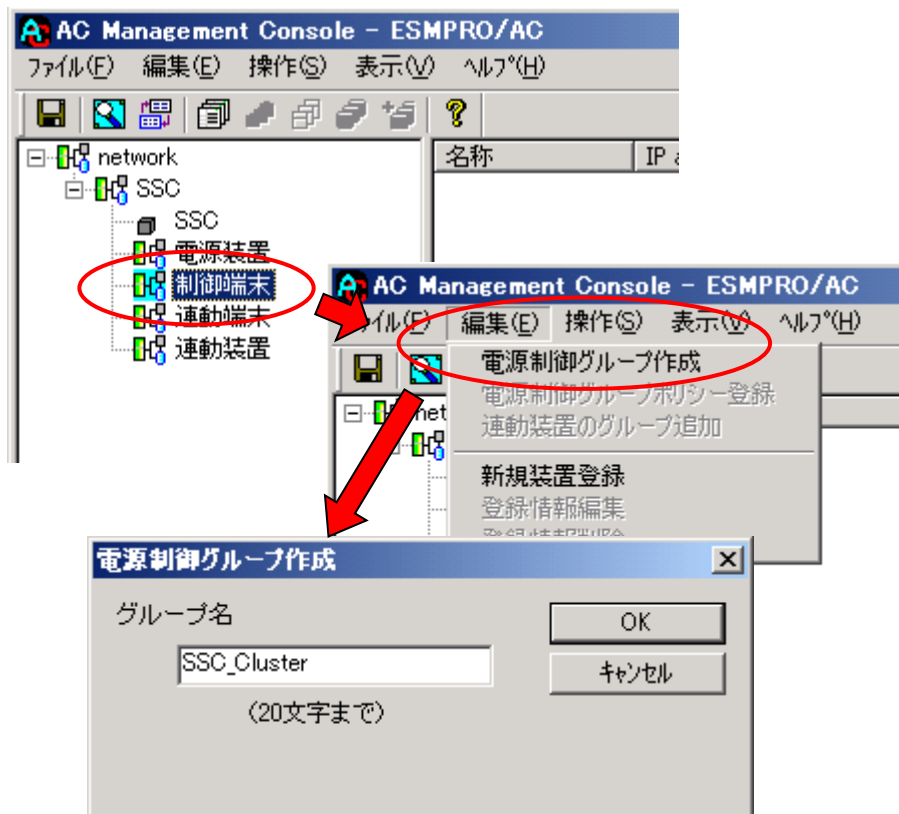
(以下は、SSC/電源管理基本パック Ver.2.1の画面です。)



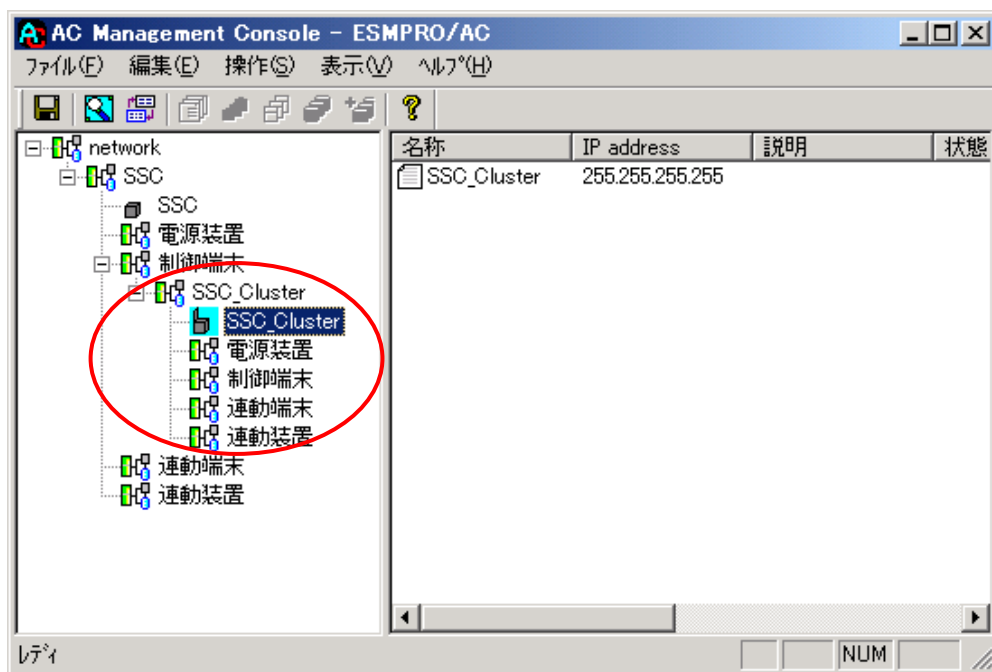
- (2)[編集]→[電源制御グループ作成]を選択、グループ名（ここでは例として「SSC」）を入力します。



(3)先ほど作成したグループ名がnetworkの下に作成されますので、次に制御端末を選択し、
[編集]→[電源制御グループ作成]を選択、グループ名（ここでは例として
「SSC_Cluster」）を入力します。

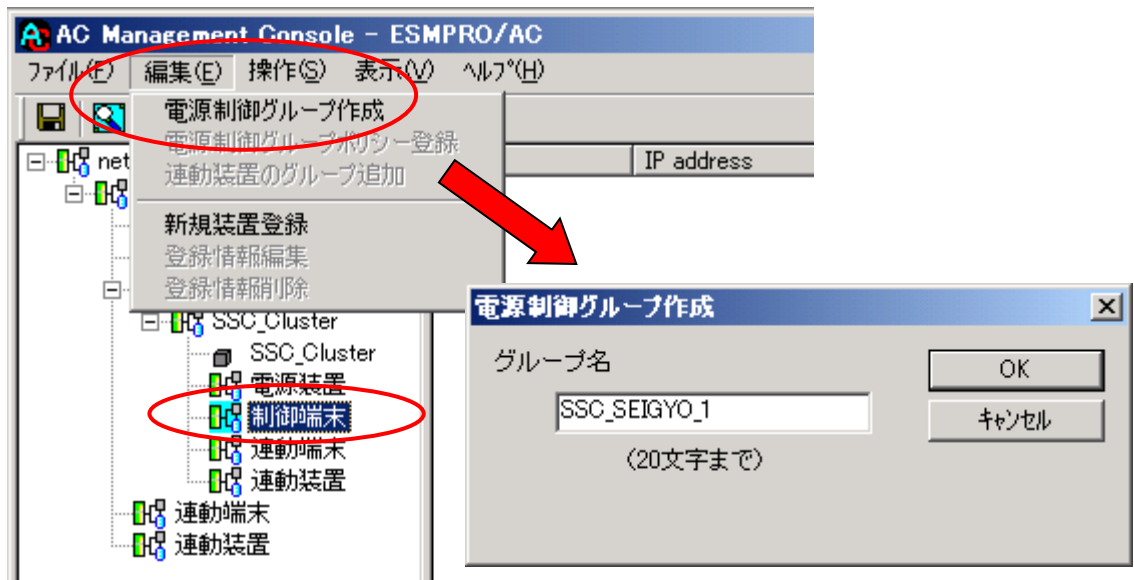


グループを追加すると以下のように「SSC」グループ配下の制御端末の下にグループ
が作成されます。

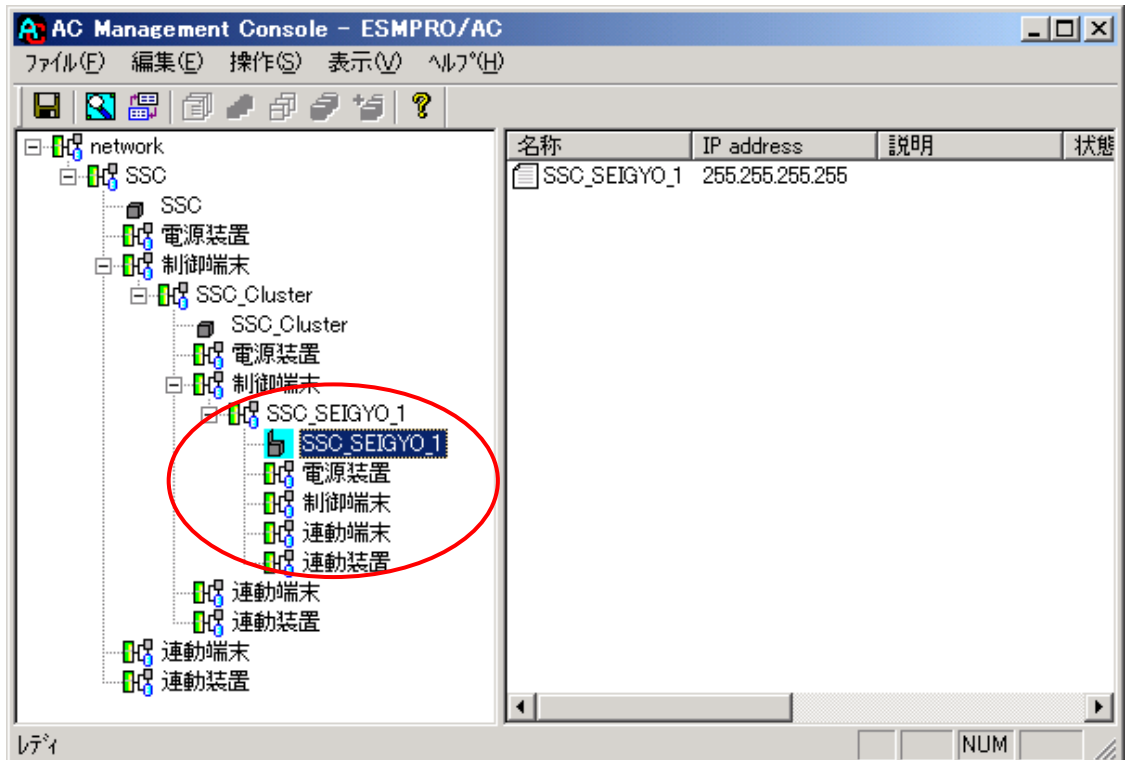


(4)(3)の手順にて作成したグループ（例では「SSC_Cluster」グループ）配下の制御端末に、クラスタを構成する各ノードの電源管理グループを作成します。

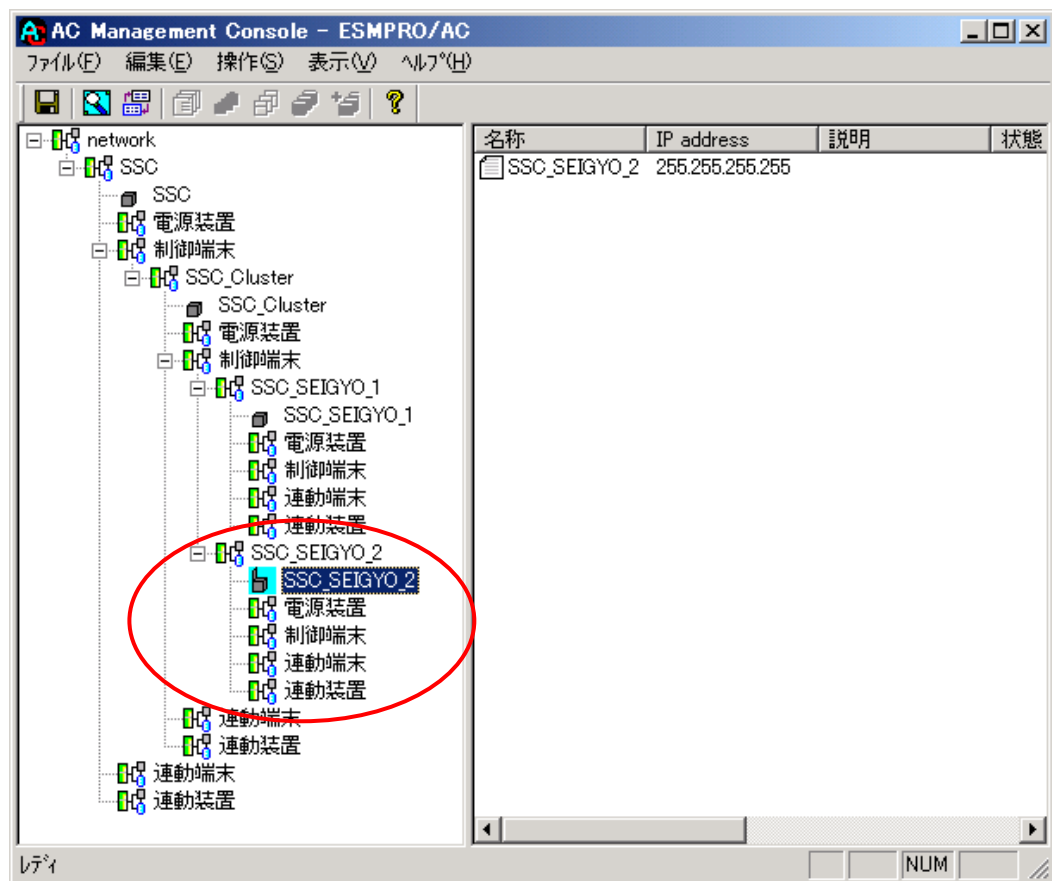
「SSC_Cluster」グループの制御端末を選択して、[編集]→[電源制御グループ作成]を選択し、1つめのクラスタノードのグループ名（ここでは例として「SSC_SEIGYO_1」）を入力してください。



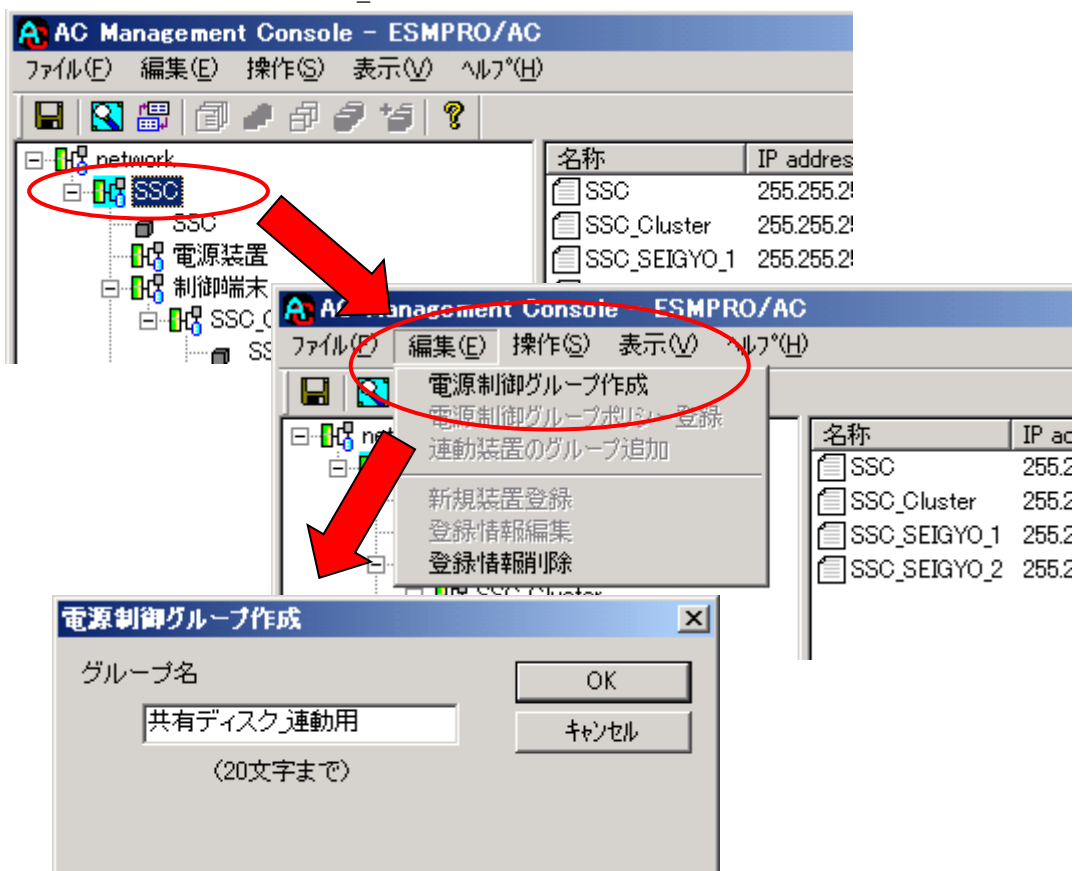
グループを追加すると以下のように「SSC_Cluster」グループの制御端末の下にグループが作成されます。



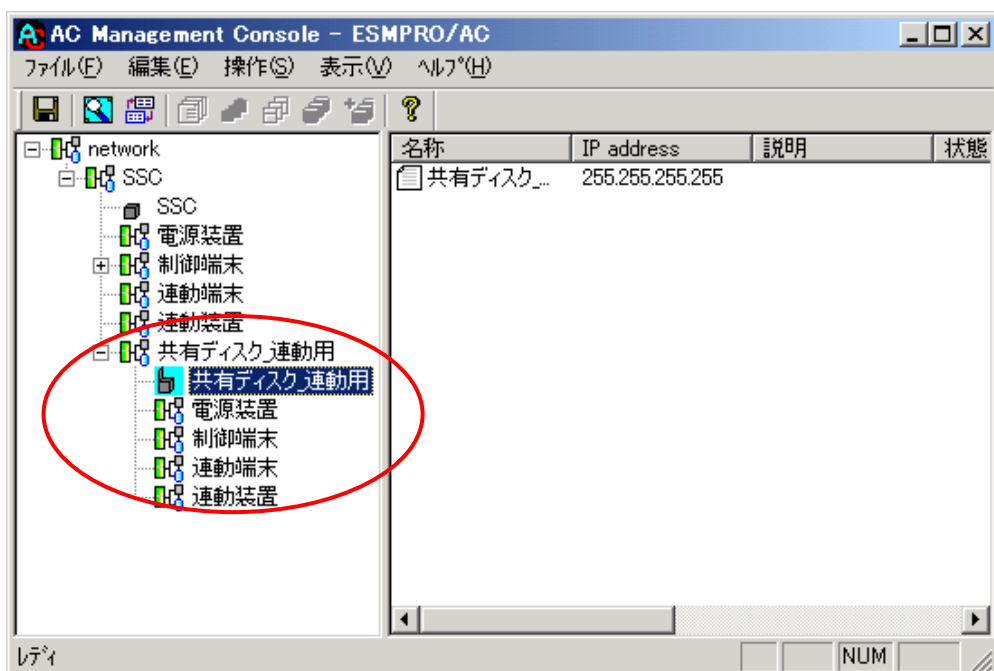
(5)(4)と同様の手順を実施して、2つめのクラスターノードのグループ（ここでは例として「SSC_SEIGYO_2」）を追加してください。
グループ追加後のツリーは以下ようになります。



(6)次に連動端末が使用する共有ディスクのグループを追加します。「SSC」グループを選択して、[編集]→[電源制御グループ作成]を選択し、連動端末が使用するグループ（ここでは例として「共有ディスク_連動用」）を追加してください。



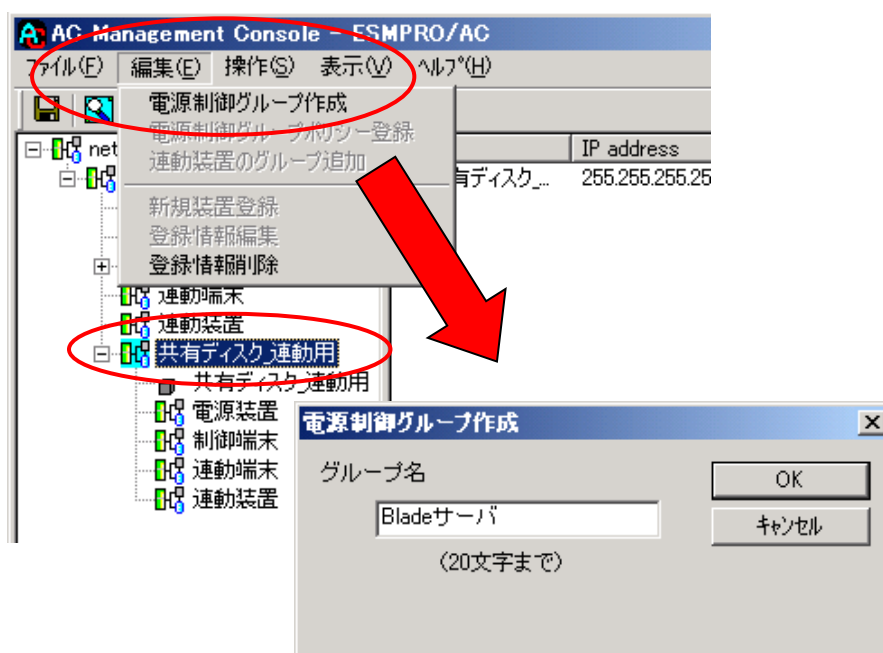
グループ追加後のツリーは以下のようになります。



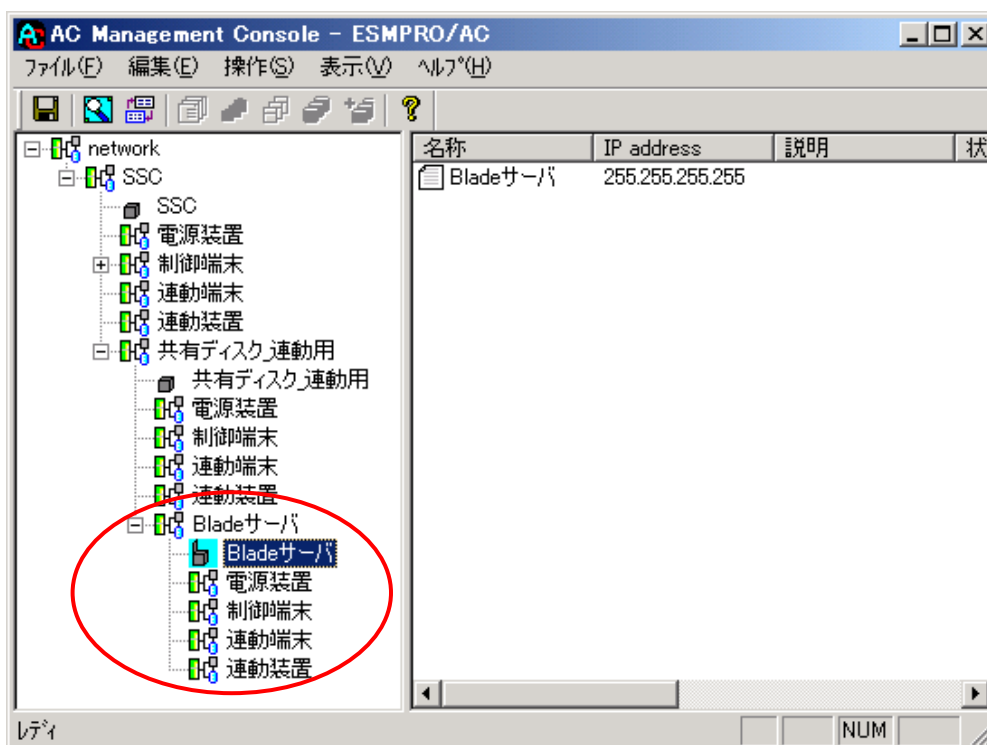
(7) 連動端末が使用する共有ディスクのグループの下に、連動端末のグループを追加します。各連動端末が使用するUPS単位でグループを追加してください。

(本例の構成ではBladeサーバと100シリーズサーバがそれぞれ別のUPSに接続されているため、2つの電源制御グループを追加します。)

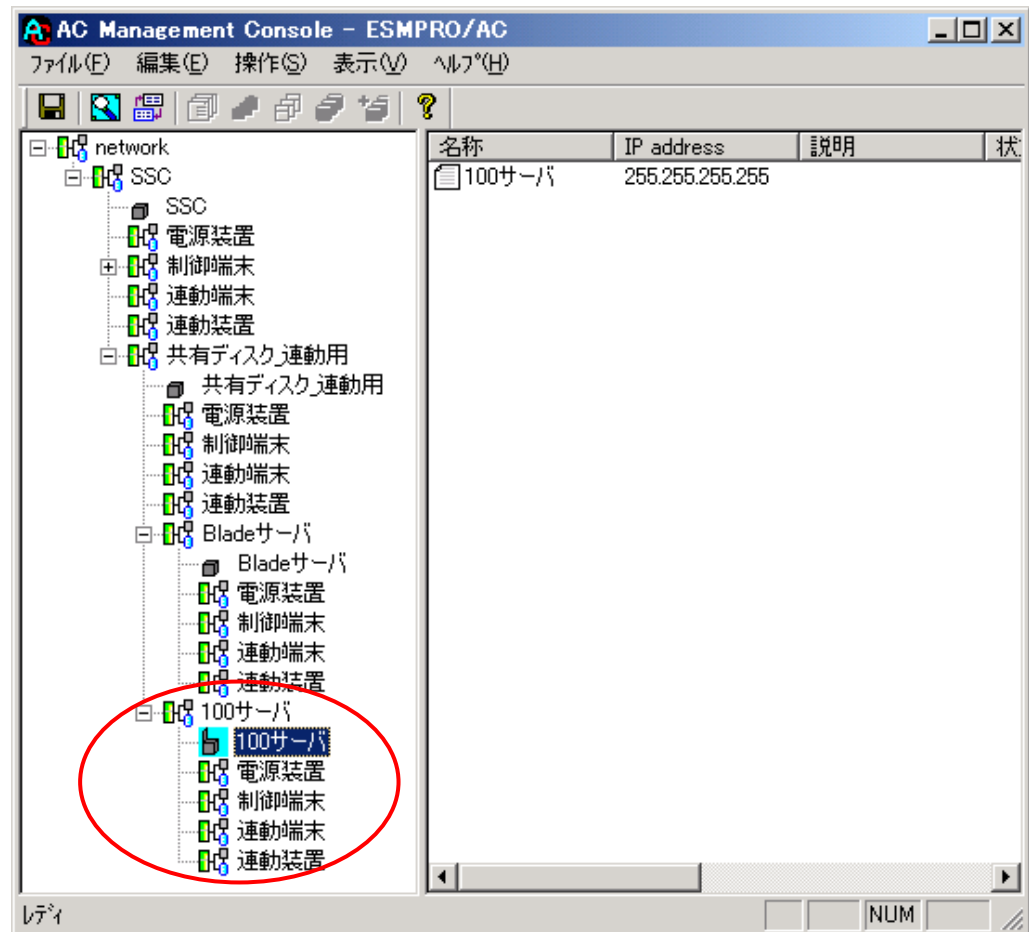
「共有ディスク_連動用」のグループを選択し、[編集]→[電源制御グループ作成]を選択してグループ（ここでは例として「Bladeサーバ」）を追加してください。



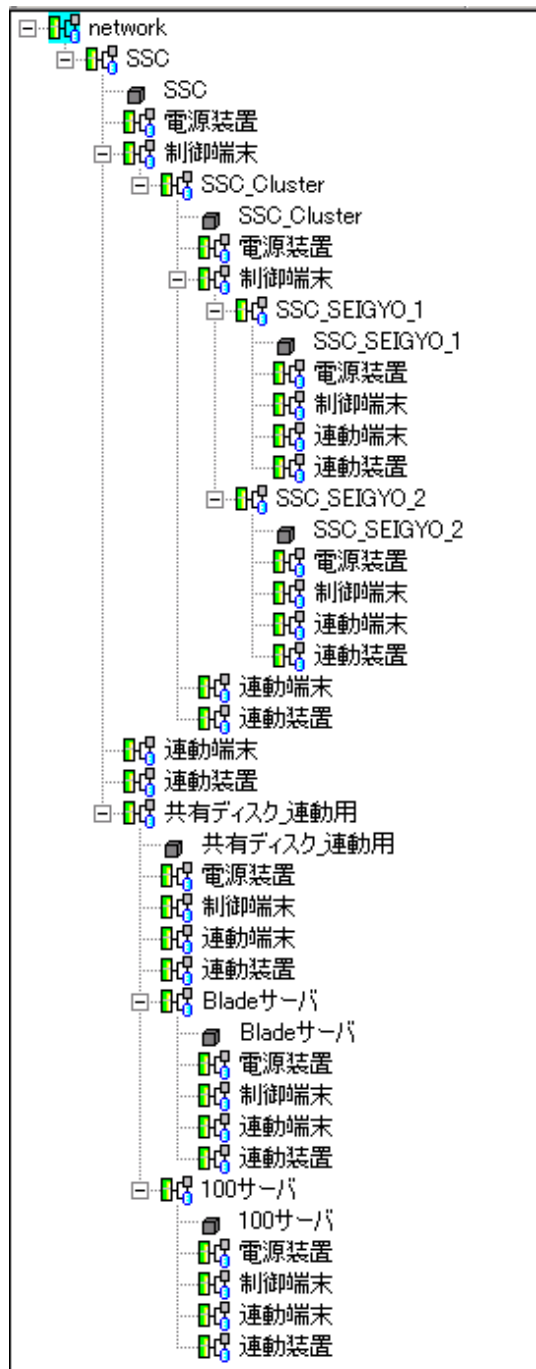
グループ追加後のツリーは以下ようになります。



- (8)(7)と同様の手順で100シリーズサーバ用の電源制御グループ（ここでは例として「100サーバ」）を追加します。
追加後のツリーは以下ようになります。



すべての電源制御グループを登録し終えたツリーを以下に示します。



6.2 UPS の登録

各電源制御グループにUPSを登録します。

説明中に記載しているUPS①～⑥は、例としてあげたP.3のシステム構成図の各UPSに記載している番号に対応しております。使用する環境にあわせて適宜読み替えてください。

※注意

UPSにて設定する「電源異常確認時間」は、以下の事項を考慮してUPSごとに適切な値を設定する必要があります。

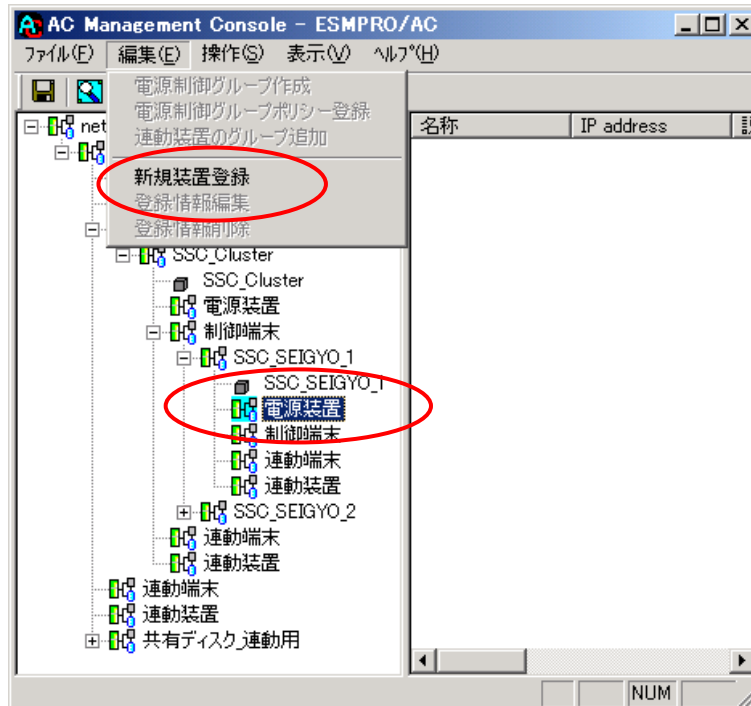
1. 制御端末のUPSの「電源異常確認時間」はすべて同じ値にしてください。
2. 連動端末、制御端末の順でシャットダウン、UPSの出力停止が行われるように、各UPSの「電源異常確認時間」は以下の大小関係となるように設定してください。
制御端末のUPS①、② > 制御端末の共有ディスクのUPS③
> 連動端末のUPS⑤、⑥ > 連動端末の共有ディスクのUPS④
3. iStorage連携機能を使用する電源制御を行うために、制御端末が連動端末の共有ディスクのキャッシュフラッシュ処理が完了したことを認識できるまで稼動しておく必要があります。
iStorage連携機能を利用した電源管理／自動運転の動作説明は「10 iStorage連携機能を使用した電源管理／自動運転について」にありますので、こちらを参照して各UPSの「電源異常確認時間」を決定してください。

上記事項を考慮した各UPSの電源異常確認時間の設定例

UPS①、②	:	930秒
UPS③	:	900秒
UPS⑤	:	60秒
UPS⑥	:	60秒
UPS④	:	30秒

(1) クラスタ化している制御端末の電源制御グループ「SSC_SEIGYO_1」にUPS①を登録します。

AMCツリーにおいて「SSC_SEIGYO_1」の電源制御グループに属する「電源装置」を選択し、[編集]→[新規装置登録]を選択します。



「電源装置」画面が表示されますので、SSC/電源管理基本パックのセットアップカード「3.5.2.2 UPSの登録」の手順(2)～(3)を参照し、制御端末のUPS情報を設定してください。

※注意

制御端末のUPSの「電源異常確認時間」はすべて同じ値にしてください。

「電源異常確認時間」は以下の大小関係が成り立ち、かつ「10 iStorage 連携機能を使用した電源管理／自動運転について」に示すシャットダウンシーケンスが正しく実施できるように設定してください。

制御端末のUPS > 制御端末が使用する共有ディスクのUPS

> 連動端末のUPS > 連動端末が使用する共有ディスクのUPS

(設定例) 電源異常確認時間

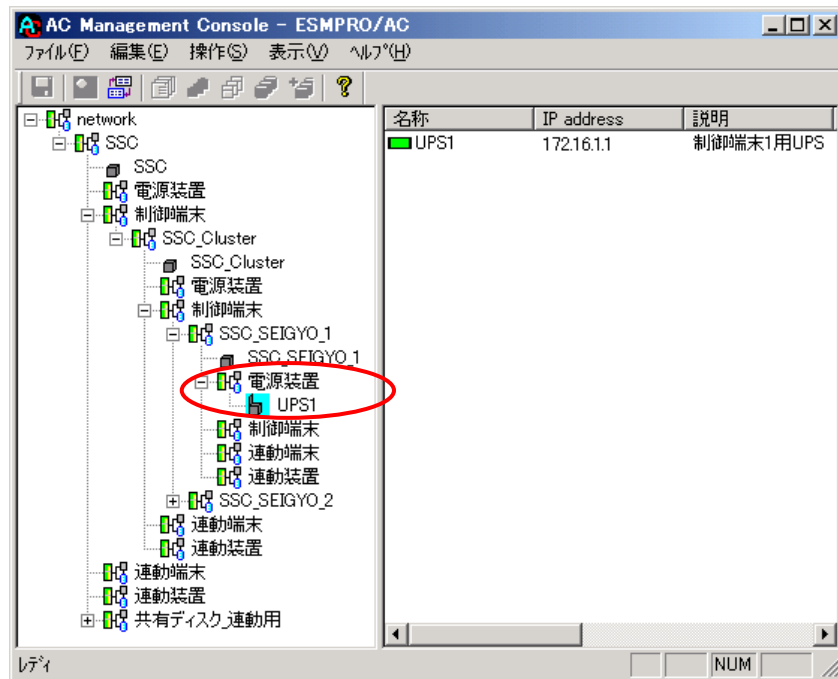
制御端末のUPS : 930 秒

制御端末が使用する共有ディスクのUPS : 900 秒

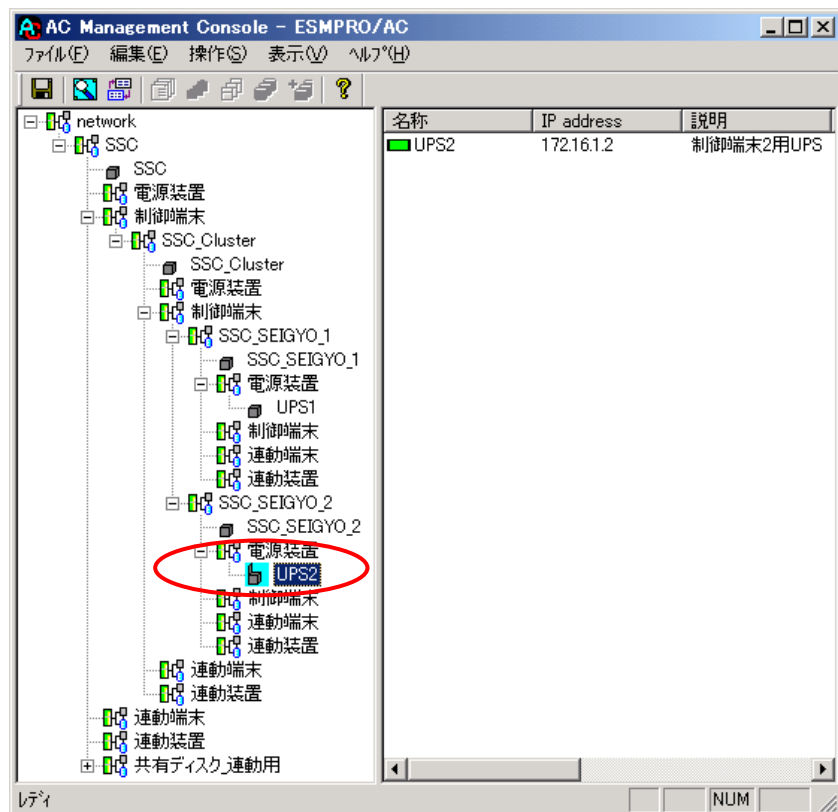
連動端末のUPS : 60 秒

連動端末が使用する共有ディスクのUPS : 30秒

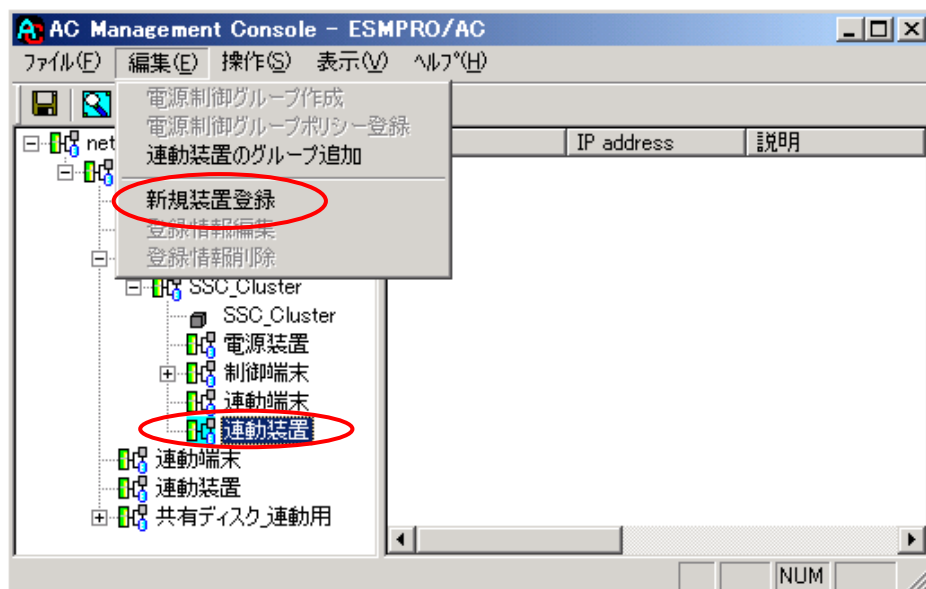
UPS①登録後のAMCツリーは以下のようになります。



(2) 同様の手順にて「SSC_SEIGYO_2」の電源制御グループに属する電源装置にUPS②を登録します。登録後のツリーは以下のようになります。



- (3)次に、制御端末が使用する共有ディスクに電源供給しているUPS③を登録します。
「SSC_Cluster」グループに属する連動装置を選択し、[編集]→[新規装置登録]を選択してください。



- (4) 電源装置画面が表示されますので、SSC/電源管理基本パックのセットアップカード「3.5.2.2 UPSの登録」の手順(2)～(3)を参照し、共有ディスクのUPS情報を設定してください。

注意: 制御端末が使用する共有ディスクの UPS 設定では以下のことに注意してください

- ①「電源異常確認時間」は以下の大小関係が成り立ち、かつ「7.11 iStorage 連携機能を使用した電源管理/自動運転について」に示すシャットダウンシーケンスが正しく実施できるように設定してください。

制御端末のUPS > 制御端末が使用する共有ディスクのUPS

> 連動端末の UPS > 連動端末が使用する共有ディスクの UPS

(設定例) 電源異常確認時間

制御端末の UPS : 930 秒

制御端末が使用する共有ディスクの UPS : 900 秒

連動端末の UPS : 60 秒

連動端末が使用する共有ディスクの UPS : 30 秒

- ②電源異常回復時にリブートを行なう場合は、「電源異常回復時にリブートする(制御端末からのリブートする)」を選択してください。

(以下は、SSC/電源管理基本パック Ver.2.1 の画面です。)

※制御端末が使用する共有ディスクは iStorage 連携機能を使用できませんので、iStorage 連携機能の設定は行わないでください。

- ③連動装置が複数台存在する場合は、それぞれの電源異常回復時の自動ブート設定は同じに設定にしてください。

複数台存在する場合は、復電後の自動起動/スケジュール起動時の起動順序を正しく行うために、以下のパラメータ設定を各連動装置で行って調整してください。

Warm-UP 順位: 連動装置が複数台ある場合、電源異常回復時に数字の順位が低い順に起動されます。

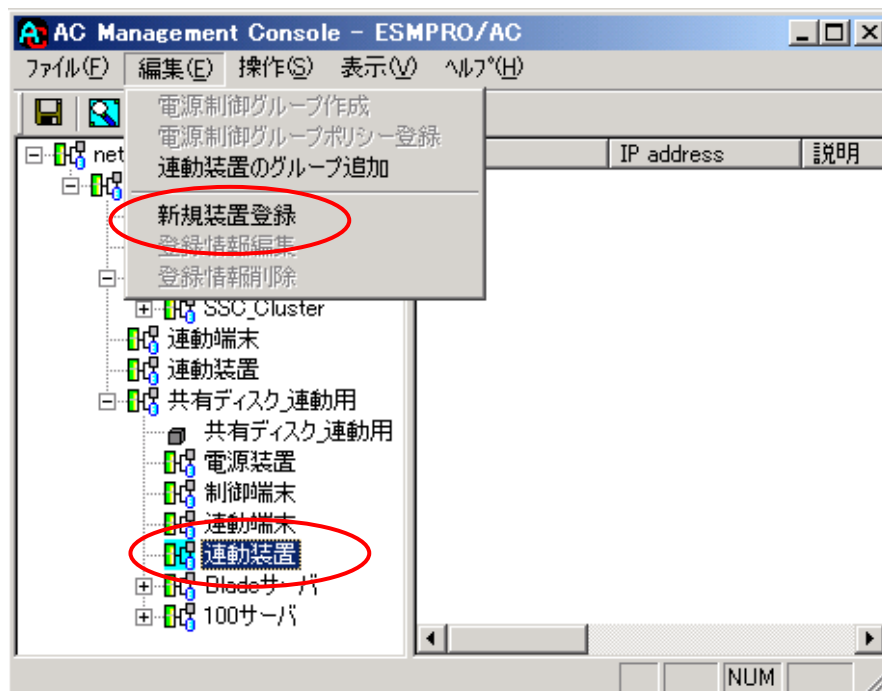
Warm-UP 時間: 共有ディスクの起動待ち合わせ時間です。スケジュール運転を行った場合、設定した時間分、共有ディスクがサーバより早く起動します。(360 秒単位で設定します。)

- ④設定したデータがその UPS の仕様上不適当な場合、UPS 側にて設定情報を自動補正する場合があります。
- ⑤各種パラメータの既定値/設定範囲は UPS の機種によって異なります。既定値のままでの運用はさけ、推奨設定値を参考の上設定変更をしてください。
- ⑥制御端末が使用する共有ディスクは iStorage 連携機能を使用できませんので、iStorage 連携機能の設定は行わないでください。

UPS③登録後のツリーは以下ようになります。



(5) 連動端末が使用する共有ディスクのUPS④を登録します。「共有ディスク_連動用」の電源制御グループに属する連動装置を選択して、[編集]→[新規装置登録]を選択します。



(6) 電源装置画面が表示されますので、SSC/電源管理基本パックのセットアップカード「3.5.2.2 UPSの登録」の手順(2)～(3)を参照し、共有ディスクのUPS情報を設定してください。

注意：iStorage 連携機能を利用する場合の UPS のパラメータ設定について

- ①「電源異常確認時間」は以下の大小関係が成り立ち、かつ「10 iStorage 連携機能を使用した電源管理／自動運転について」に示すシャットダウンシーケンスが正しく実施できるように設定してください。

制御端末のUPS > 制御端末が使用する共有ディスクのUPS

> 連動端末のUPS > 連動端末が使用する共有ディスクのUPS

(設定例) 電源異常確認時間

制御端末の UPS：930 秒

制御端末が使用する共有ディスクの UPS：900 秒

連動端末の UPS：60 秒

連動端末が使用する共有ディスクの UPS：30 秒

- ②電源異常回復時にリブートを行なう場合は、「電源異常回復時にリブートする(制御端末からリブートする)」を選択してください。

- ③連動装置が複数台存在する場合は、それぞれの電源異常回復時の自動ブート設定は同じに設定にしてください。

複数台存在する場合は、復電後の自動起動／スケジュール起動時の起動順序を正しく行うために、以下のパラメータ設定を各連動装置で行って調整してください。

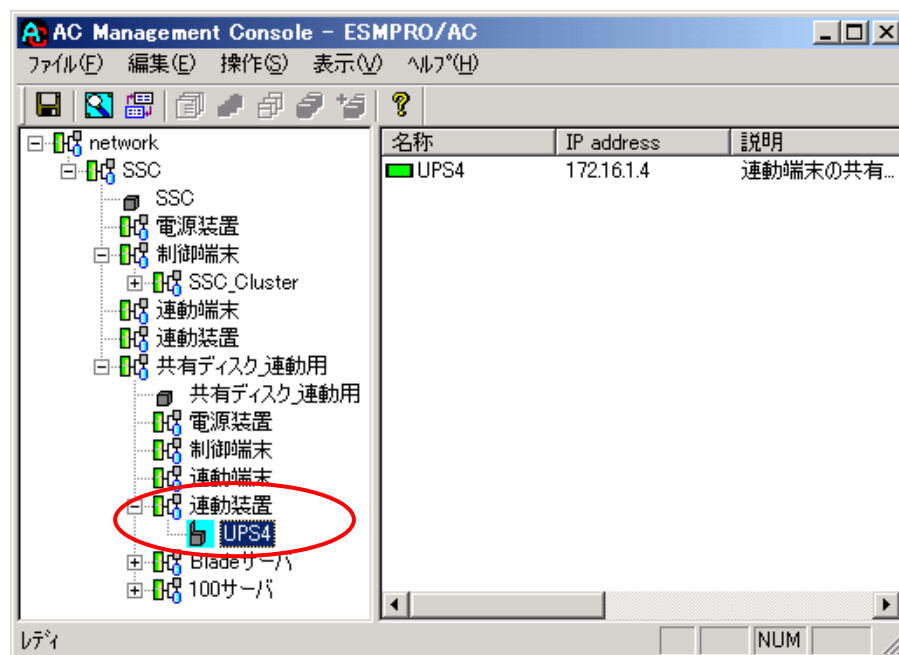
Warm-UP 順位：連動装置が複数台ある場合、電源異常回復時に数字の順位が低い順に起動されます。

Warm-UP 時間：共有ディスクの起動待ち合わせ時間です。スケジュール運転を行った場合、設定した時間分、共有ディスクがサーバより早く起動します。(360 秒単位で設定します。)

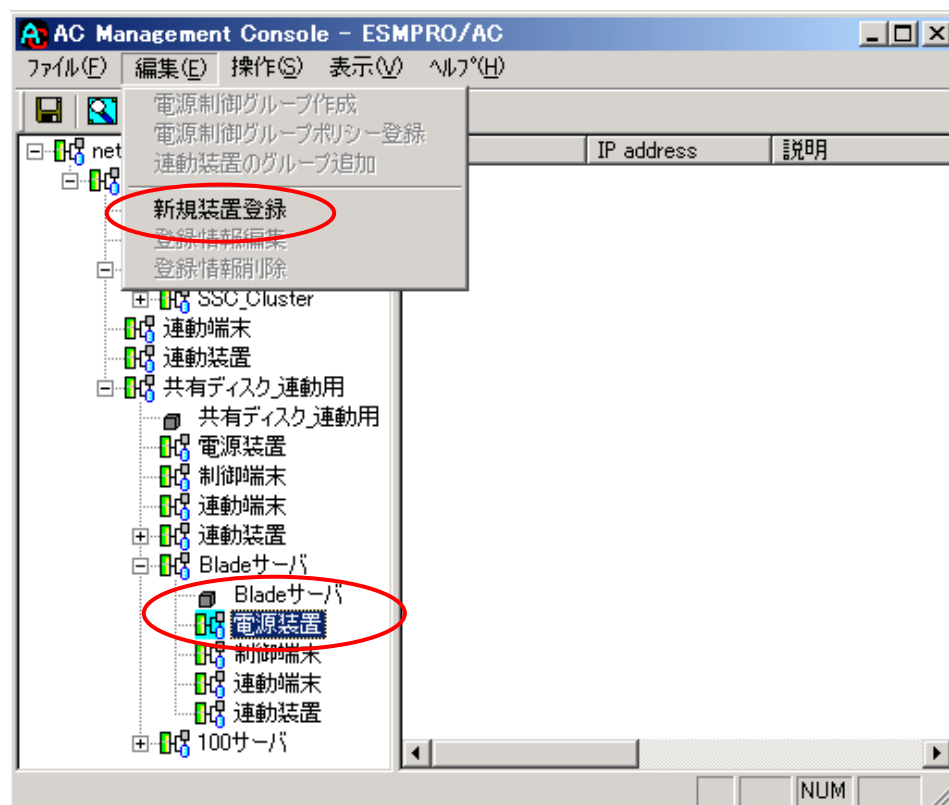
- ④設定したデータがその UPS の仕様上不適当な場合、UPS 側にて設定情報を自動補正する場合があります。

- ⑤各種パラメータの既定値/設定範囲はUPSの機種によって異なります。既定値のままでの運用はさけ、推奨設定値を参考の上設定変更をしてください。

UPS④登録後のツリーは以下のようになります。

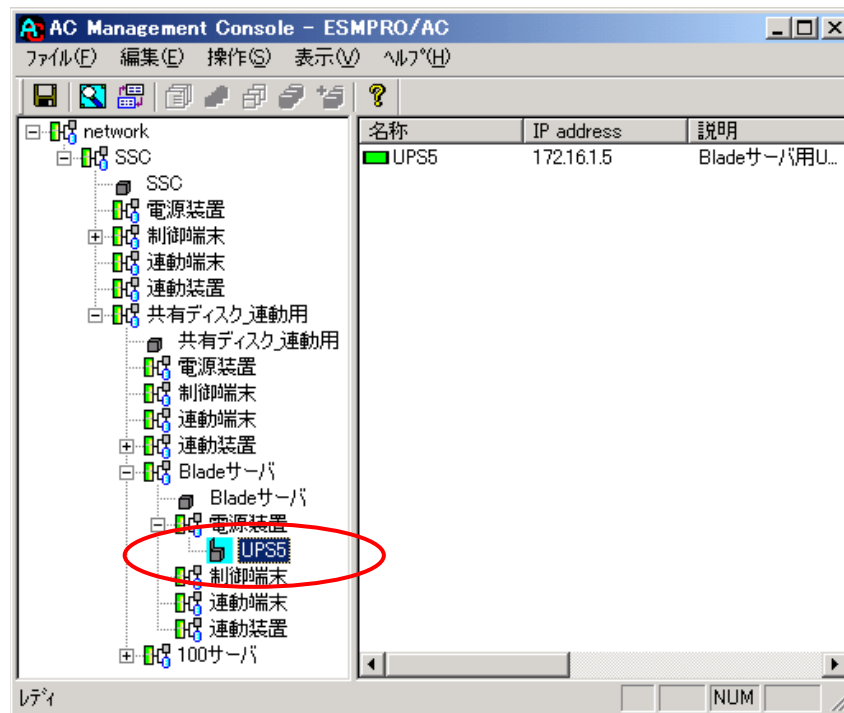


(7)ブレードサーバ（連動端末）が使用するUPS⑤を登録します。「Bladeサーバ」の電源制御グループに属する「電源装置」を選択し、[編集]→[新規装置登録]を選択します。

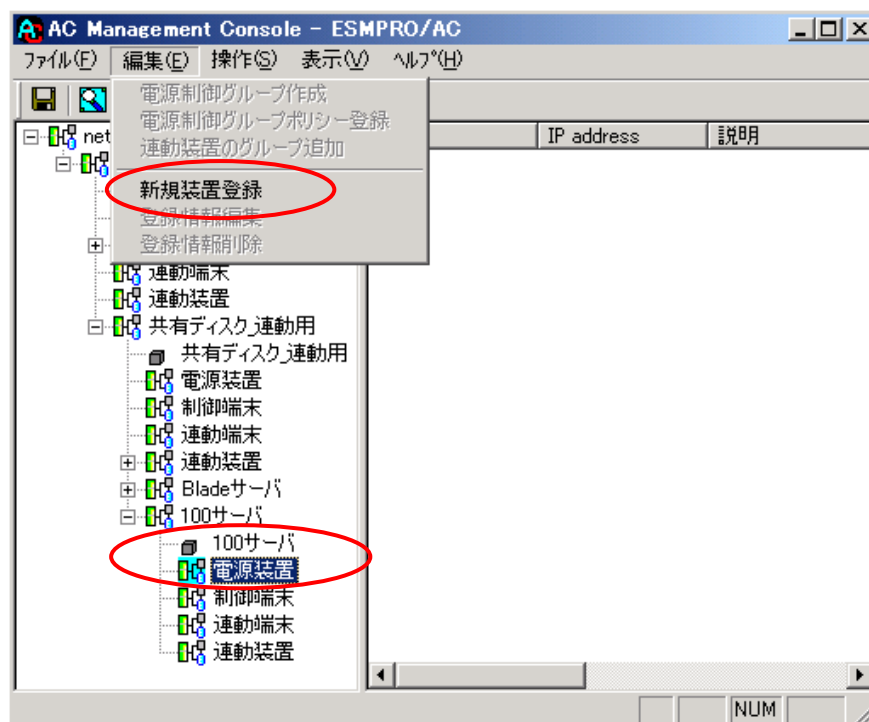


- (8) 電源装置画面が表示されますので、SSC/電源管理基本パックのセットアップカード「3.5.2.2 UPSの登録」の手順(2)~(3)を参照し、BladeサーバのUPS情報を設定してください。

UPS⑤登録後のツリーは以下のようになります。

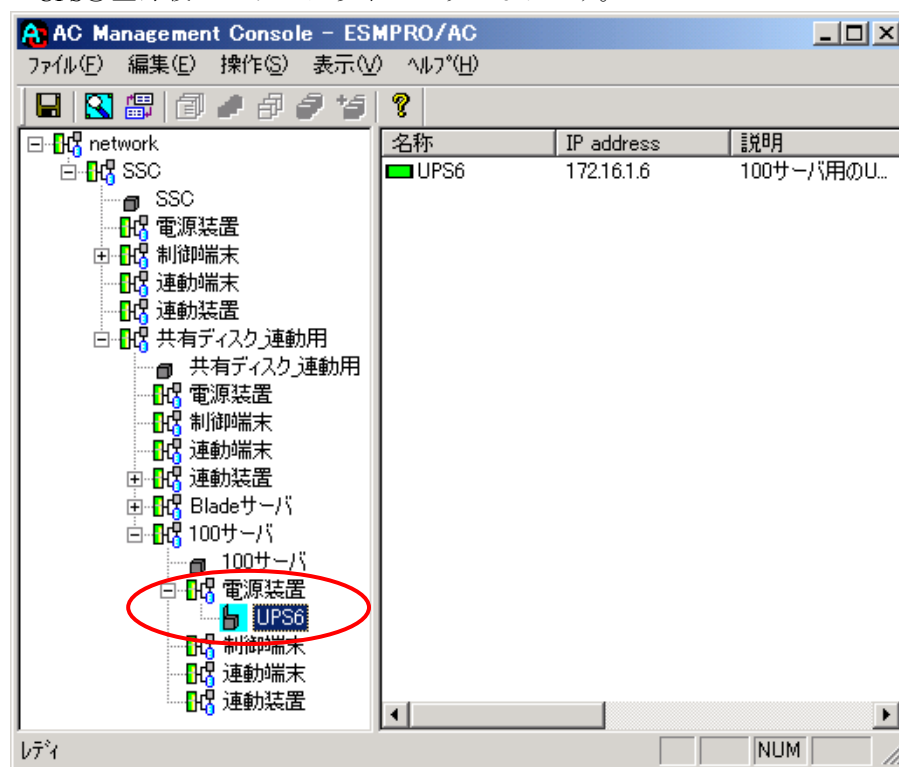


- (9) 100シリーズサーバが使用するUPS⑥を登録します。「100サーバ」の電源制御グループに属する「電源装置」を選択し、[編集]→[新規装置登録]を選択します。

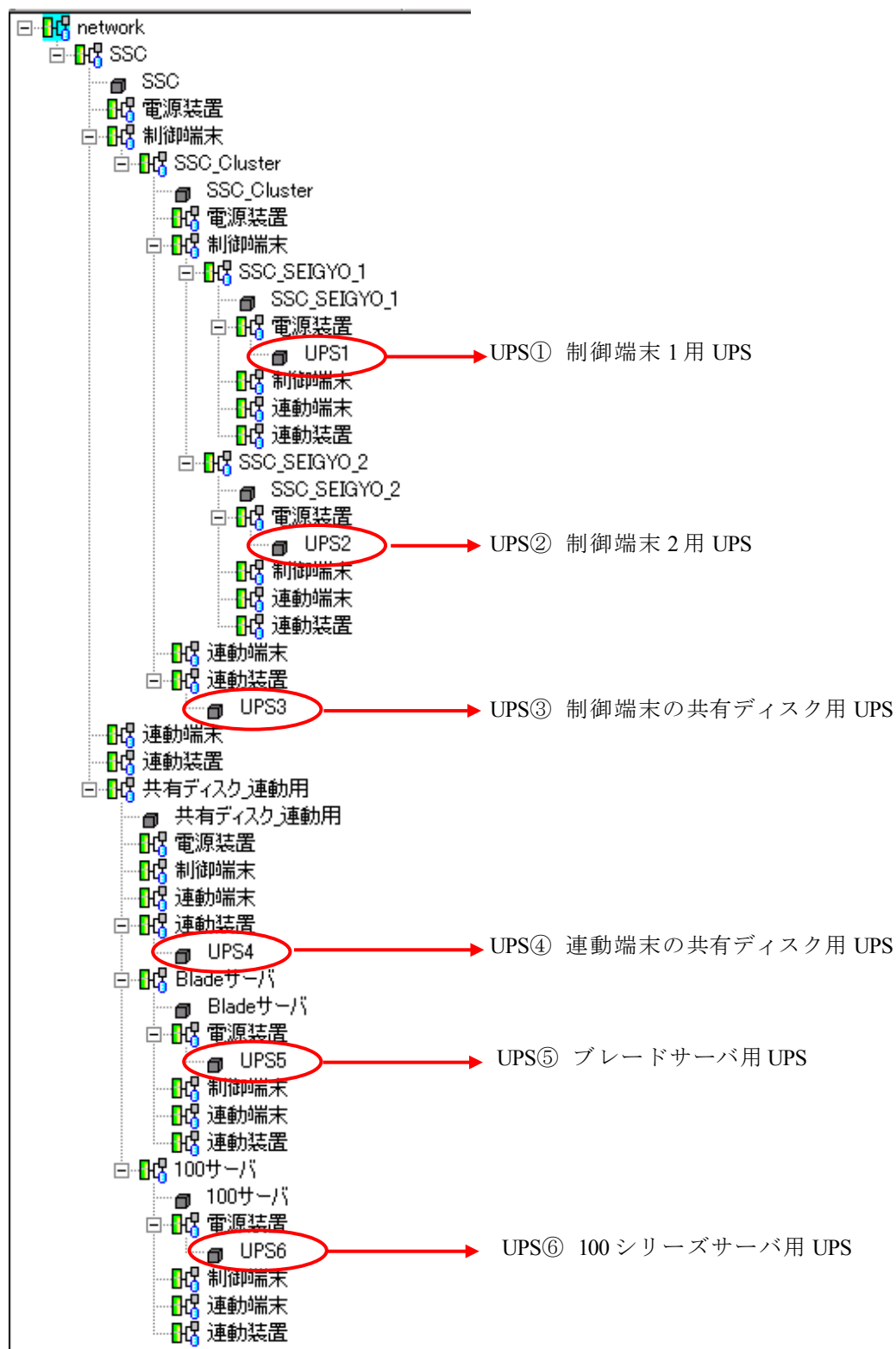


- (10) 電源装置画面が表示されますので、SSC/電源管理基本パックのセットアップカード「3.5.2.2 UPSの登録」の手順(2)~(3)を参照し、BladeサーバのUPS情報を設定してください。

UPS⑥登録後のツリーは以下のようになります。



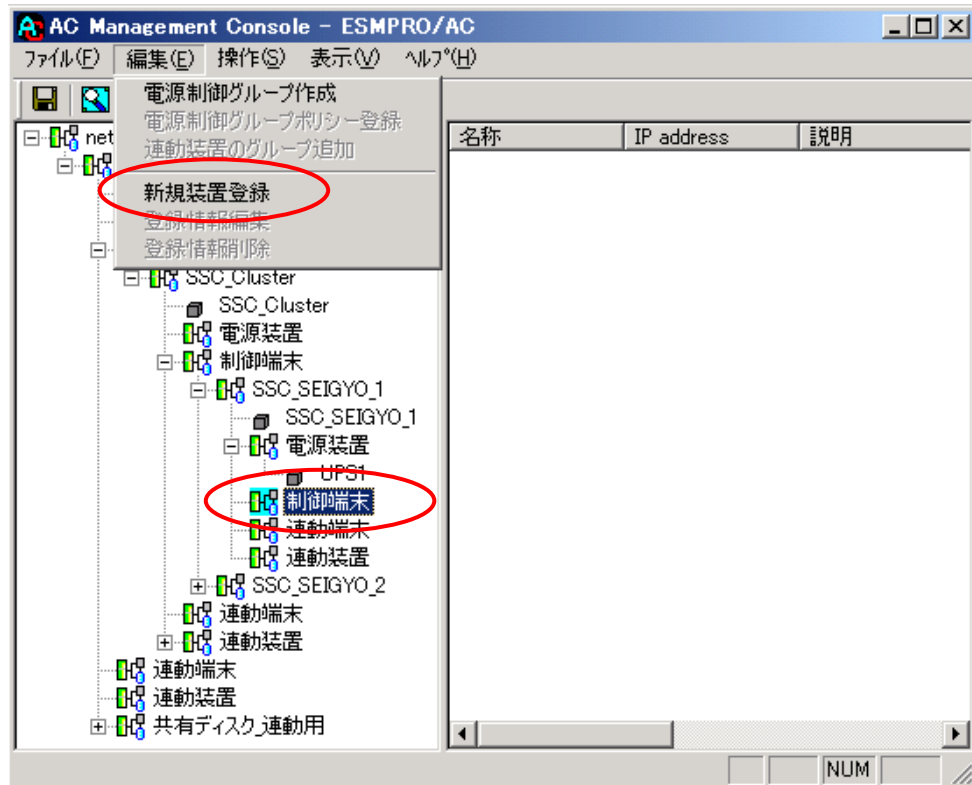
すべてのUPSを登録したツリーを以下に示します。



6.3 制御端末の登録

制御端末をツリーに登録します。

- (1)電源制御グループ「SSC_SEIGYO_1」のUPS①に接続している制御端末を登録します。AMCツリーにおいて「SSC_SEIGYO_1」の電源制御グループに属する「制御端末」を選択し、[編集]→[新規装置登録]を選択します。



- (2)制御端末の登録画面が表示されますので、サーバ名、IPアドレスを入力してください。

制御端末(サーバ)

ESM/PRO/AC EnterpriseかAC Advanceをセットアップし、電源管理制御が行えるサーバの登録・編集を行います

OK
キャンセル

名称: SSC-CL-SV1 (コンピュータ名: 15文字まで。Linuxの場合は大/小文字を区別する必要あり)
☒ コンピュータ名を大文字に自動変換する。(Linuxの場合は無効)

IP address: 172.16.1.11 (例: 172.16.1.10)

説明: クラスタ化管理サーバ1

☐ Linux
☐ SNMP Trapを使用しない

ブラウザ設定

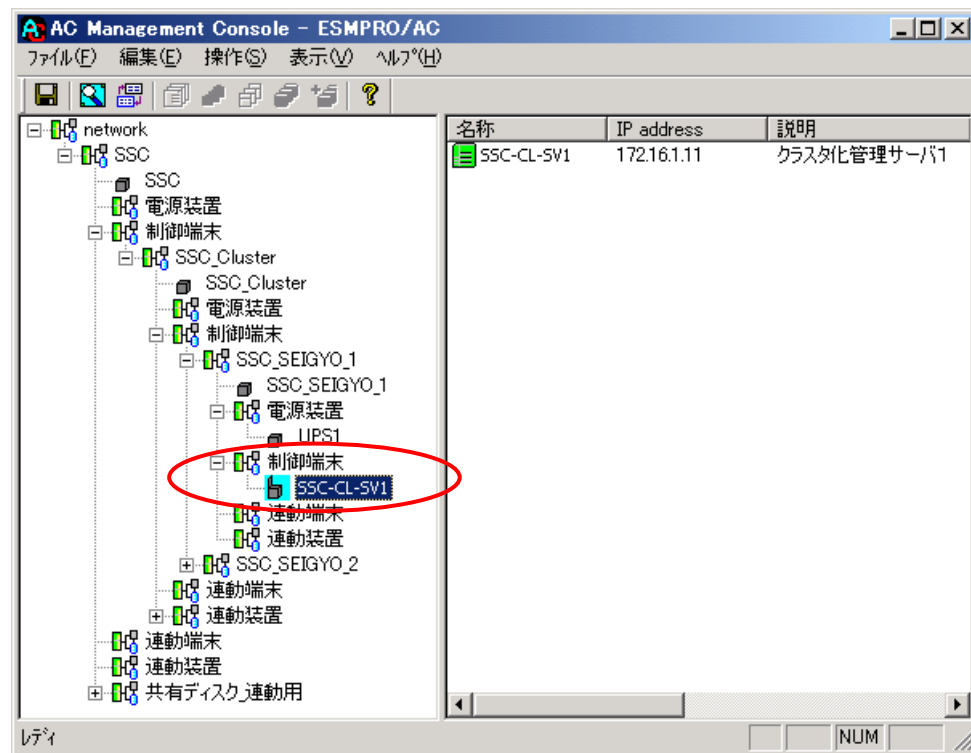
☐ Advance option mode

リモート起動用 MAC address:

リモート起動用 IP address:

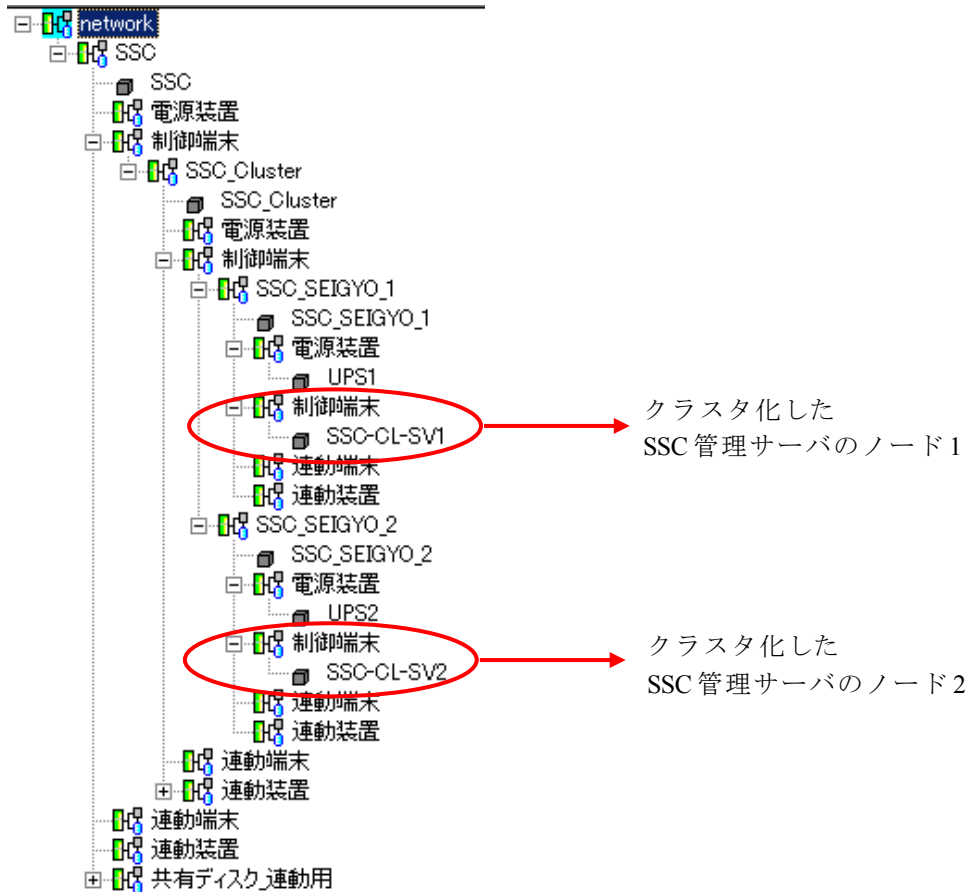
リモート起動用 ネットマスク:

(3)1台目の制御端末登録後のツリーは以下のようになります。



(4)同様の手順にて、2台目の制御端末を「SSC_SEIGYO_2」の電源制御グループの「制御端末」に登録してください。

2台の制御端末をそれぞれの電源グループに登録した後のツリーは以下のようになります。



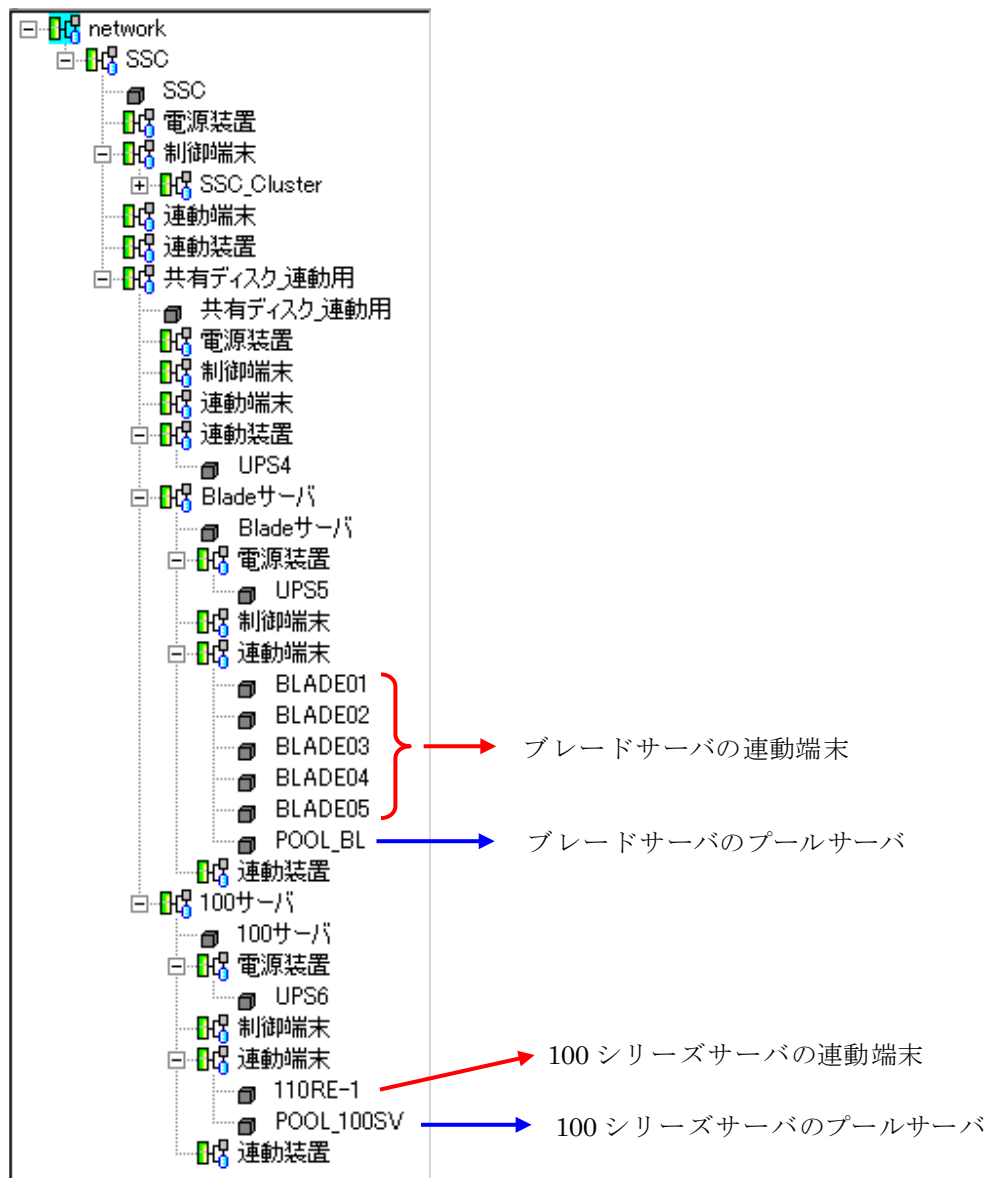
6.4 連動端末の登録

連動端末を接続しているUPSが属する電源制御グループに、それぞれ連動端末を登録してください。

ブレードサーバと100シリーズサーバでは登録手順が異なります。詳細な登録手順についてはSSC/電源管理基本パックのセットアップカード「3.5.4 連動端末の登録」を参照してください。

プールサーバとして運用するサーバがある場合は、SSC/電源管理基本パックのセットアップカード「3.5.5. プールサーバの登録」を参照してください。

本構成例での全サーバ登録完了後のツリーは以下のようになります。



6.5 グループポリシーの設定および設定保存

すべての連動端末およびプールサーバ登録完了後は、AMCの画面にてグループポリシーの設定変更を行ってください。手順の詳細はSSC/電源管理基本パックのセットアップカードを参照してください。

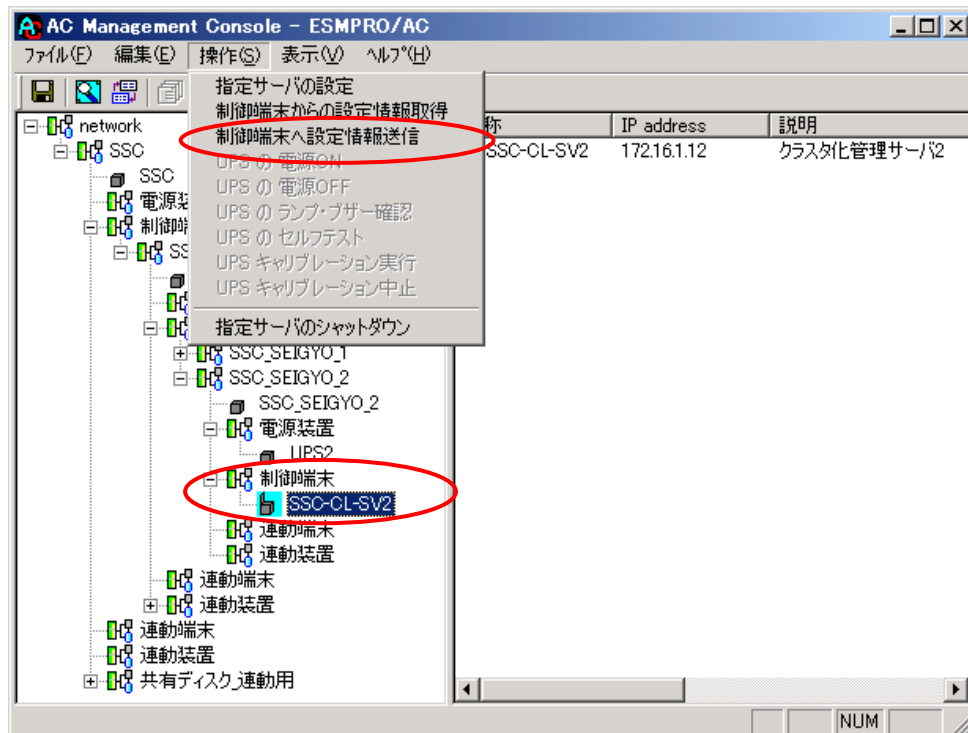
グループポリシーの設定まで実施し終わったら、AMCのメニュー[ファイル]→[設定保存]を選択して、設定内容を保存してください。

6.6 他の制御端末への情報転送

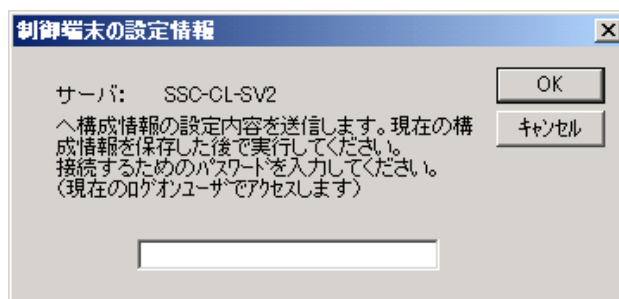
ここまでの手順で作成したAMCの設定情報を他の全ての制御端末に転送します。転送操作はAMCの操作で実施します。

(ここでは「SSC-CL-SV2」の制御端末へ転送する操作を例に説明します。)

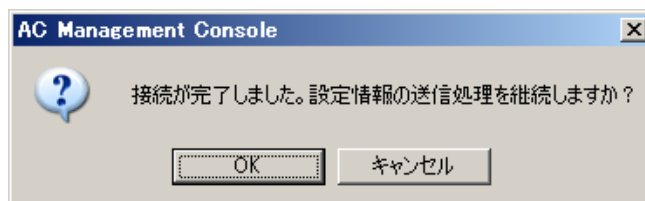
- (1)構成情報を転送するサーバ(ここでは「SSC-CL-SV2」)をAMCのツリー上で選択し、[操作]→[制御端末へ設定情報送信]を選択します。



- (2)以下の画面が表示されますので、パスワードを入力してOKボタンを押します。



- (3)正しく接続できると以下の画面が表示されますので、OKボタンを押してください。



(4)送信が完了すると以下のメッセージが表示されます。



他にも送信対象の制御端末がある場合は、同様に(1)～(4)の操作を実施して構成情報を送信してください。

6.7 iStorage 連携設定

SSC/電源管理基本パックの制御による停電／スケジュールシャットダウンの際に、iStorage連携機能によるキャッシュフラッシュ処理を行うための設定です。

すべての制御端末において以下の設定を行ってください。

なお、使用するSSC/電源管理基本パックのバージョンにより、iStorage連携の設定手順が異なります。ご使用のバージョンに該当する説明を参照して行ってください。

6.7.1 SSC/電源管理基本パック Ver. 2.1 の場合

- (1) AC Management Consoleツリーにて連動装置下にある「UPS」を選び「メニューバー：編集」の「登録情報編集」を実行すると、以下の様な「連動装置」編集画面が表示されますので、「iStorage連携」を選択します。

The screenshot shows the '電源装置' (Power Device) configuration window. The '電源装置管理情報' (Power Device Management Information) tab is active. The '連動装置の電源' (Linkage Device Power) is set to '冗長なし' (No Redundancy). The 'IP address' is '172.16.1.4'. The 'SNMP コミュニティ名' (SNMP Community Name) is 'public'. The '説明' (Description) is '連動端末の共有ディスク用UPS' (UPS for shared disk of linkage terminal). The '電源異常' (Power Abnormality) section has '電源異常確認時間' (Power Abnormality Confirmation Time) set to 30 Sec and 'Warm-UP 順位' (Warm-UP Rank) set to 1. The '電源異常回復時にリポートしない' (Do not report when power abnormality recovers) radio button is selected. The 'Warm-UP 時間' (Warm-UP Time) is 0 Sec. The 'バッテリー温度監視' (Battery Temperature Monitoring) section has '55 °C 上限' (55 °C Upper Limit) and '0 °C 下限' (0 °C Lower Limit). The 'iStorage連携' (iStorage Linkage) button is circled in red. The 'SNMP設定情報' (SNMP Setting Information) section has '名称' (Name) set to 'UPS4'. The '情報の上書きを' (Overwrite the information) button is also visible.

- (2) 以下のように「iStorage S/D/Mシリーズを利用したシステムでESMPRO/ACによる電源管理を行う」にチェックを入れて、「追加するiStorage S/D/MシリーズのIPアドレス」にiStorage装置のIPアドレスを入力して「追加」ボタンを押します。

The screenshot shows the 'iStorage連携機能' (iStorage Linkage Function) configuration window. The 'iStorage S/D/Mシリーズを利用したシステムでESMPRO/ACによる電源管理を行う' (Perform power management using ESMPRO/AC in a system using iStorage S/D/M series) checkbox is checked. The '追加するiStorage S/D/MシリーズのIPアドレス' (Add iStorage S/D/M series IP address) section has a table with the following data:

UPS IPアドレス	iStorage IPアドレス
172.16.1.4	172.16.1.61

The '追加' (Add) button is circled in red. The '削除' (Delete) button is also visible. The '共通情報設定...' (Common Information Setting...) button is at the bottom left. The 'OK', 'キャンセル' (Cancel), and 'ヘルプ' (Help) buttons are at the bottom right.

- (3) 通信で利用するTCP/IPポート番号と、iStorage連携におけるキャッシュフラッシュの監視タイムアウト時間を変更する場合は、「iStorage連携機能」画面の「共通情報設定」ボタンを選択して、数値を変更します。

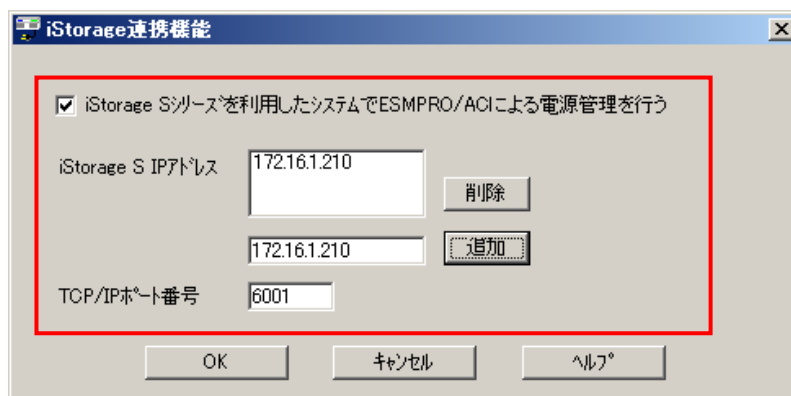
(デフォルト値、TCP/IP番号：6001、監視タイムアウト時間：300秒)



- (4) 全ての制御端末にて上記設定を終えたら、クラスタ再起動または、全ての制御端末で「ESMPRO/ARC Service」サービスの再起動を行います。

6.7.2 SSC/電源管理基本パック Ver. 1.0 の場合

- (1) 制御端末上でエクスプローラ等からSSC/電源管理基本パックをインストールしたフォルダ(デフォルト システムドライブ¥AUTORC)下の「ISOTRAGE.exe」を起動してください。iStorage連携機能画面が表示されます。
- (2) 下記のように「iStorage Sシリーズを利用したシステムでESMPRO/ACによる電源管理を行う」チェックボックスをオンにし、iStorage Sシリーズ/DシリーズのIPアドレスに使用するiStorageのIPアドレスとTCP/IPポート番号を登録し、「OK」を選択します。



- (3) iStorage連携におけるキャッシュフラッシュのタイムアウト時間を設定します。
デフォルトの設定値は20分となっておりますので、使用するiStorage装置の
キャッシュフラッシュのタイムアウト時間がデフォルト値と異なる場合は、以下
の設定を行ってください。
(タイムアウト時間を変更する必要がない場合、本手順は不要です。)

1. エクスプローラからSSC/電源管理基本パックのインストールフォルダの下に
ある「DATA」フォルダを開いて、「config.apc」ファイルをメモ帳などのエディ
タで開いてください。
2. [AcStorage]セクションを探してください。その末尾にキー「CacheFlashWait」
を追加し、タイムアウト時間（秒）を記載して保存してください。

```
[AcStorage]
Storage=1
StorageCount=1
Storage00=172.16.1.210
StoragePort=6001
CacheFlashWait=300
```

※注意
最後は必ず改行を行ってください。

- (4) 全ての制御端末にて上記設定を終えたら、クラスタ再起動または、全ての制御端
末で「ESMPRO/ARC Service」サービスの再起動を行います。

7 ESMPRO/AC GUIからの一次設定

7.1 クラスタシステム連携設定

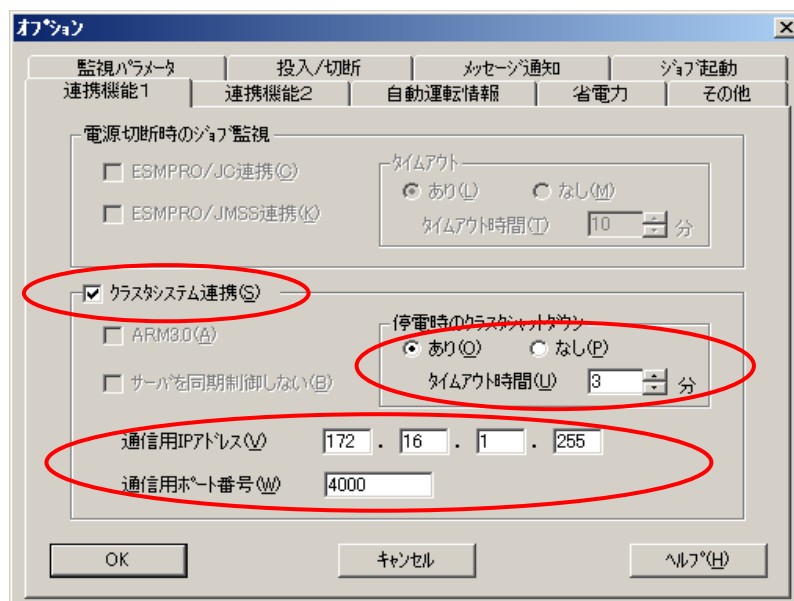
AMCの設定を終了したら、ESMPRO/AC GUIにより、クラスタシステム連携を行う設定をしてください。本設定はクラスタを構成するすべてのノードに対して行います。

[スタート]→[プログラム]→

[ESMPRO/AutomaticRunningController]→

[ESMPRO_AC]

で、ESMPRO/AC GUI を起動し、「オプション」を選択してください。



パラメータ	設定値	
クラスタシステム連携	固定	必ずチェックして下さい
停電時のクラスタシャットダウン	必須	「あり」を選択して下さい タイムアウト時間は任意です
タイムアウト時間	必須	停電の際にクラスタシャットダウンを行うかの設定。バッテリー容量を確認して設定して下さい。
通信用 IP アドレス	必須	クラスタの属する LAN のローカルブロードキャストアドレスを設定して下さい。変更する場合はシステムで統一する必要があります。 既定値：255.255.255.255 ※ローカルブロードキャストアドレスの算出方法は、次ページを参照ください。 ※設定を変更した場合は、すべてのサーバを再起動する必要があります。
通信用ポート番号	必須	クラスタ連携時に ESMPRO/AC が使用する TCP/IP port 番号を設定して下さい。変更する場合はシステムで統一する必要があります。 既定値：4000 ※設定を変更した場合は、すべてのサーバを再起動する必要があります。

設定が済みましたら、「オプション」ダイアログの「OK」を選択し、メインメニュー

の「OK」を選択して、ESMPRO/AC GUIを終了させてください。

<CLUSTERPRO による ESMPRO/AC との連携設定>

Windows Server 2008、2003 等の x64 Edition および Windows Server 2008 R2 以降の OS でクラスタシステムを動作させている場合、CLUSTERPRO 側の ESMPRO/AC との連携機能を有効にする必要があります。各クラスタサーバのコマンドラインより以下のコマンドを実行し、ESMPRO/AC との連携が有効になるように設定してください。

```
clpacmode enable
```

※clpacmode コマンドをパラメータなしで起動すると、現在の設定内容が表示されます。

) ESMPRO/AC との連携が無効の場合、以下が出力されます。

```
Command succeeded.
```

```
current acmode: disabled
```

) ESMPRO/AC との連携が有効の場合、以下が出力されます。

```
Command succeeded.
```

```
current acmode: enabled
```

コマンド実行後は、Web ブラウザを起動して CLUSTERPRO の WebManager に接続し、クラスタ停止/開始操作を行い、設定内容を有効にしてください。

※ローカルブロードキャストアドレスの算出方法

以下に通信用IPアドレスとして設定するブロードキャストアドレスの算出方法を記述します。

(例)

以下のネットワーク環境の場合のブロードキャストアドレス算出方法

IPアドレス 172.16.134.12
サブネットマスク 255.255.255.0

- ①IPアドレス（172.16.134.12）とサブネットマスク（255.255.255.0）をアンドした値を出します。

```
10101100.00010000.10000110.00001100    <－ IPアドレス
& 11111111.11111111.11111111.00000000    <－ サブネットマスク
-----
10101100.00010000.10000110.00000000
```

- ②この値とサブネットマスク（255.255.255.0）のビット反転データをオアします。その値が、ブロードキャストアドレスになります。

```
00000000.00000000.00000000.11111111    <－ サブネットマスクビット反転データ
| 10101100.00010000.10000110.00000000    <－ IPアドレスとサブネットマスクのアンド値
-----
10101100.00010000.10000110.11111111    <－ 172.16.134.255（ブロードキャストアドレス）
```

IPアドレス	: 172.16.134.12
サブネットマスク	: 255.255.255.0
ローカルブロードキャストアドレス	: 172.16.134.255

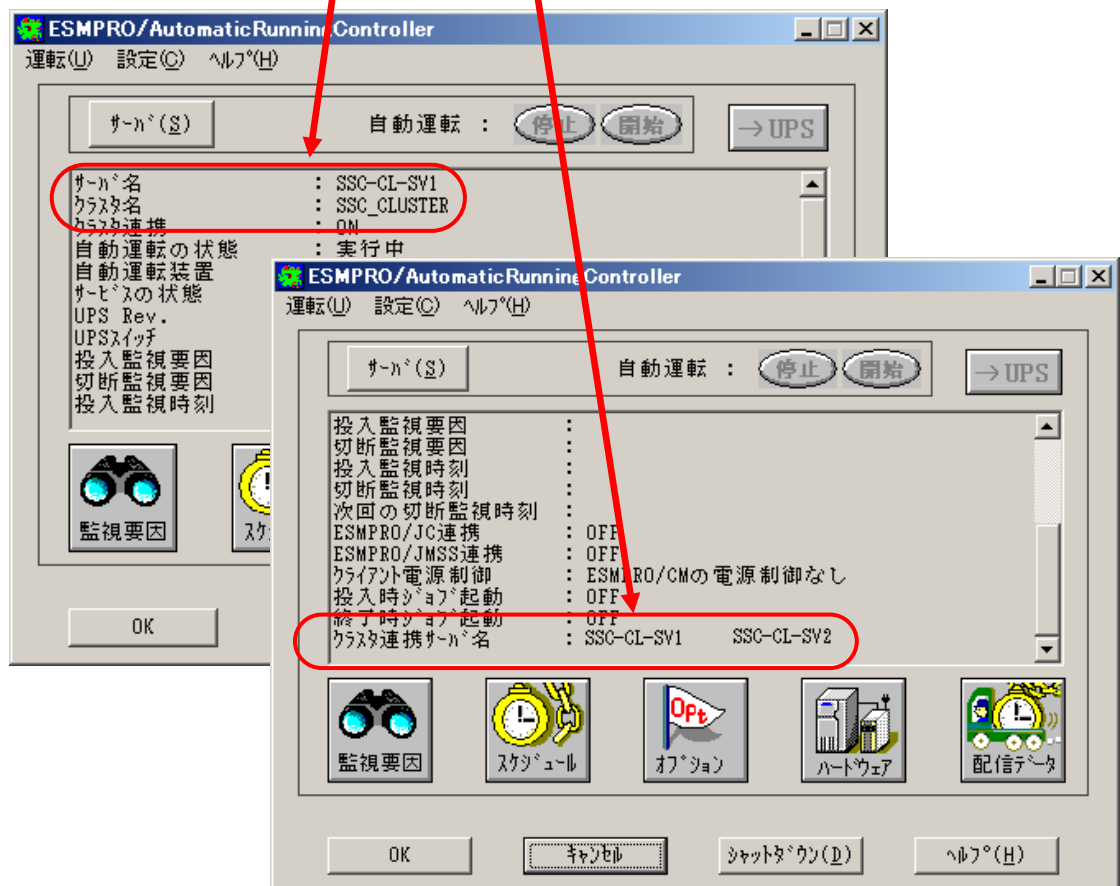
7.2 ESMPRO/AC の設定内容確認

すべてのサーバでクラスタシステム連携を行う設定が終了しましたら、クラスタ再起動を行ってください。再起動後、ESMPRO/AC GUIおよびAMCを起動して、それぞれ以下のように表示されていれば、SSC/電源管理基本パックのCLUSTERPRO連携設定は完了です。

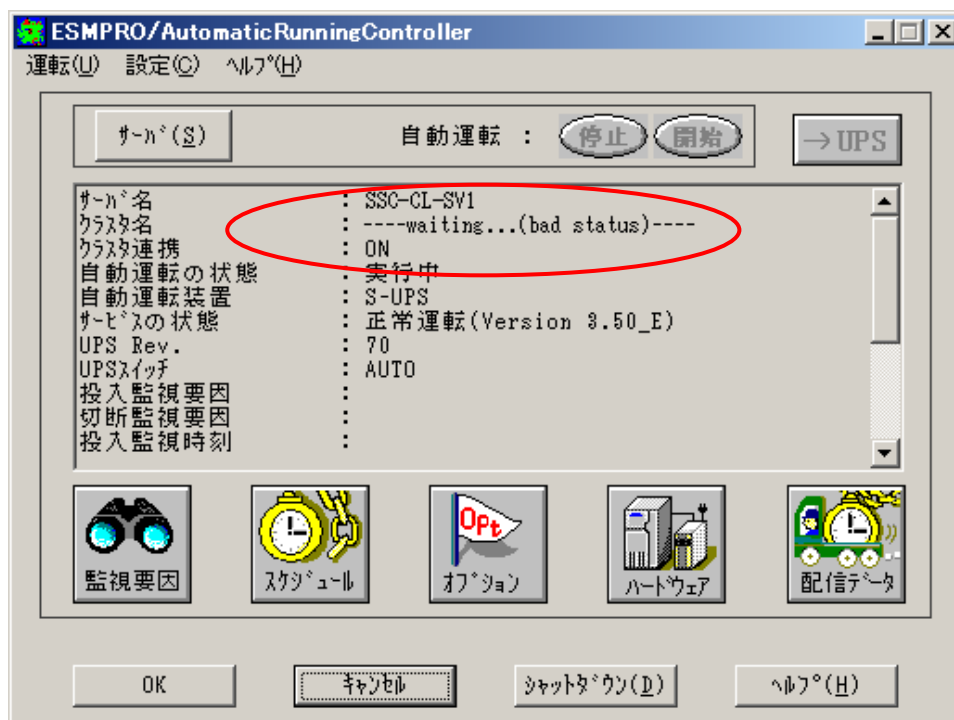
※クラスタが異常状態の場合、正常に表示されません。

(1) ESMPRO/AC GUIでの設定確認

- 「クラスタ名」 : 表示
「クラスタ連携」 : ON
「クラスタ連携サーバ名」 : ウィンドウの最後にクラスタを構成するサーバ名のリストを表示



注意： クラスタ再起動すぐにESMPRO/AC GUIを起動しますと、下記のように表示されることがあります。その場合は、一度「キャンセル」でESMPRO/AC GUIを終了し、少し時間をおいてから、ESMPRO/AC GUIを起動し、再確認を行ってください。

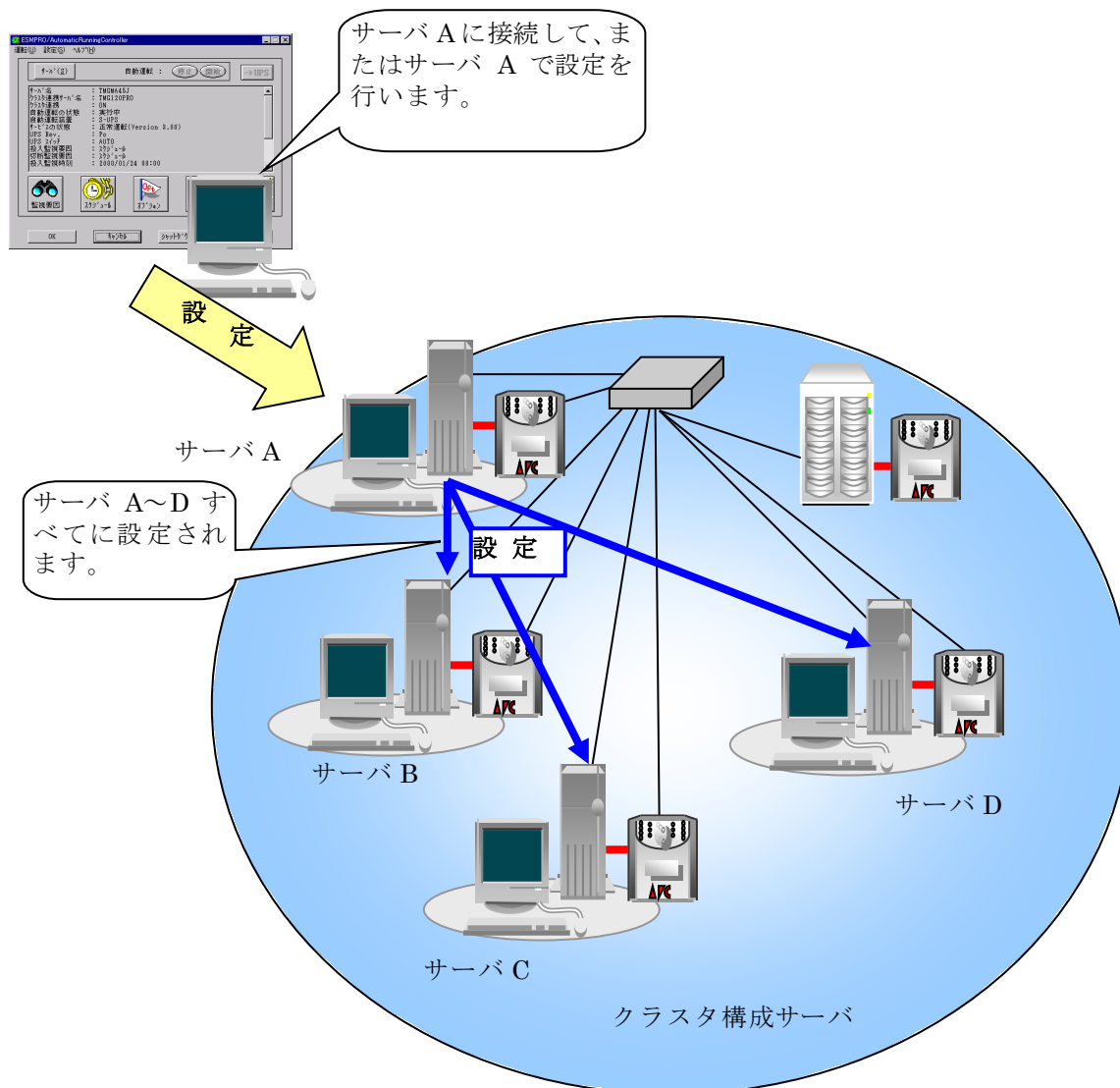


(2) AMCでの表示確認

名称	IP address	説明	状態
SSC	172.16.1.255		
SSC_Cluster	172.16.1.255		-----
SSC_SEIGYO_1	172.16.1.255		-----
UPS1	172.16.1.1	制御端末1用UPS	正常ON
SSC-CL-SV1	172.16.1.11	クラスタ化管理サーバ1	マスタ動作中
SSC_SEIGYO_2	172.16.1.255		-----
UPS2	172.16.1.2	制御端末2用UPS	正常ON
SSC-CL-SV2	172.16.1.12	クラスタ化管理サーバ2	通常運用中(クラスタ)
UPS3	172.16.1.3	制御端末の共有ディスク用UPS	* 正常ON
共有ディスク連...	172.16.1.255		-----
UPS4	172.16.1.4	連動端末の共有ディスク用UPS	* 正常ON
Bladeサーバ	172.16.1.255		-----
UPS5	172.16.1.5	Bladeサーバ用UPS	正常ON
BLADE01	172.16.1.21		通常運用中
BLADE02	172.16.1.22		通常運用中
BLADE03	172.16.1.23		通常運用中
BLADE04	172.16.1.24		通常運用中
BLADE05	172.16.1.25		通常運用中
POOL_BL	0.0.0.0		プールサーバ
100サーバ	172.16.1.255		-----
UPS6	172.16.1.6	100サーバ用のUPS	正常ON
110RE-1	172.16.1.31		通常運用中
POOL_100SV	0.0.0.0		プールサーバ

8 ESMPRO/AC の設定（自動運転の設定）

ESMPRO/AC の一次設定が済みしたら、ESMPRO/AC GUI で自動運転の運用条件の設定を行います。自動運転の設定は、ESMPRO/AC GUI を起動し、クラスタシステムを構成するサーバの 1 台（現用系でも、待機系でも構いません）と接続すると、自動的にクラスタのシステム構成が認識され、「クラスタ連携サーバ名」が表示されます。この「クラスタ連携サーバ名」が表示されている状態で、各種運用条件やスケジュールを登録すると、クラスタ全体に設定が行われます。



以下は、クラスタ環境における自動運転の必ず必要な設定について記述しています。

①ESMPRO/AC GUIを起動します。

②「オプション」ボタンを選択し、「連携機能1」タグを選択してください。

パラメータ	設定値	
ESMPRO/JC 連携	任意	
ESMPRO/JMSS 連携	任意	
タイムアウト	任意	
クラスタシステム連携	固定	必ずチェックして下さい
停電時のクラスタシャットダウン	必須	ESMPRO/AC の一次設定で設定済みです。変更が必要な場合のみ変更します。
タイムアウト時間	必須	ESMPRO/AC の一次設定で設定済みです。変更が必要な場合のみ変更します。
通信用 IP アドレス	必須	ESMPRO/AC の一次設定で設定済みです。変更が必要な場合のみ変更します。 ※設定を変更した場合は、すべてのサーバを再起動する必要があります。
通信用ポート番号	必須	ESMPRO/AC の一次設定で設定済みです。変更が必要な場合のみ変更します。 ※設定を変更した場合は、すべてのサーバを再起動する必要があります。

③「オプション」ボタンを選択した場合に選択できる「連携機能1」「メッセージ通知」「ジョブ起動」「連携機能2」「省電力」タグにつきましては任意で設定してください。

④「監視要因」ボタンを押し、「投入要因」タグを選択して下さい。

パラメータ		設定値	
基本部	スケジュール	任意	スケジュールによる自動電源投入を行う場合、チェックして下さい。自動電源投入を行わない場合は、チェックを外して下さい。 ※スケジュールによる自動電源投入を行う場合は、別途、スケジュールの登録が必要です。 スケジュールの登録は、メインメニューから「スケジュール」ボタンを選択して設定します。

⑤ 「監視要因」 ボタンを押し、「切断要因」 タグを選択して下さい。

パラメータ		設定値	
基本部	スケジュール	任意	スケジュールによる自動電源切断を行う場合、チェックして下さい。自動電源切断を行わない場合は、チェックを外して下さい。 ※スケジュールによる自動電源切断を行う場合は、別途、スケジュールの登録が必要です。 スケジュールの登録は、メインメニューから「スケジュール」ボタンを選択して設定します。
	LAN	任意	設定する場合は、「LAN 切断情報」ボタンを選択して、LAN 切断情報を入力する必要があります。

9 停電時のシャットダウン

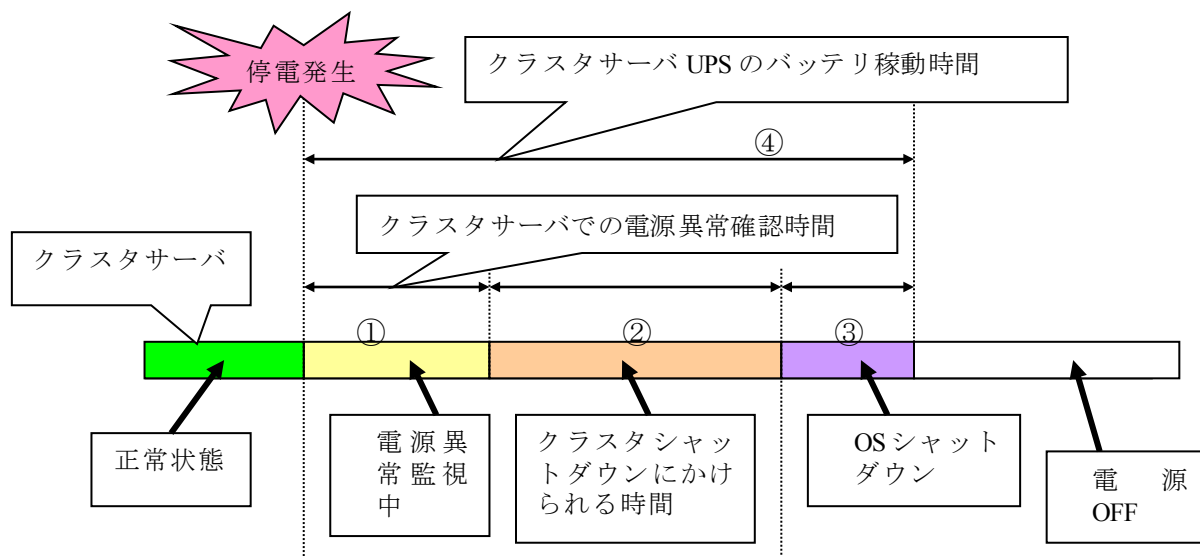
9.1 シャットダウン関連時間

通常のUPSをクラスタシステムで使用した場合、停電が発生してサーバがシャットダウンされると、個別障害と判断され、サーバシャットダウンとなります。自動フェイルバックを使用している場合でも、全てのサーバで停電が発生した場合には、全サーバがサーバシャットダウンしてしまうのでクラスタの復旧作業をマニュアルで行わないと、クラスタ環境として復旧できません。

しかし、SigmaSystemCenter/電源管理基本パックで自動運転している場合は、UPSの**バッテリーバックアップ容量が十分な環境**であれば、停電時に自動的にクラスタを正常終了させてシャットダウンし、停電が復旧したならば自動的に全サーバを起動し直して復旧し、そのまま通常の運用に戻ることが可能になります。

注意：

UPSのバッテリーバックアップ可能時間が、クラスタシャットダウンに必要な時間よりも短いと、クラスタシャットダウン中にUPSのバッテリーが切れてしまいクラスタのみならずOS自体にも被害がおよぶ恐れがあります。



停電時にクラスタシャットダウンが開始する条件

- ・②の時間内にクラスタシャットダウンが終了する事が期待出来る。
- ・クラスタサーバや周辺装置のUPSが、④の時間以上バッテリー稼動できる。

なお SigmaSystemCenter/電源管理基本パックは、停電によりクラスタシャットダウンを起動した場合、②の時間経過してもクラスタシャットダウンが終了しない時には、タイムアウトとして強制的にOSのシャットダウンを実行します。

停電関連のパラメータ設定画面

[AMCの電源装置設定画面]

[クラスターサーバ]
→ ①の時間を設定

電源装置管理情報

電源装置名: 冗長なし

IPアドレス: 172.16.1.1

SNMPコミュニティ名: public

説明: 制御端末1用UPS

電源異常

電源異常確認時間: 930 Sec

Warm-UP 順位: []

Warm-UP 時間: 0 Sec

電源異常回復時にリポートしない

電源異常回復時にリポートする (UPSによるリポート)

電源異常回復時にリポートする (制御端末からリポートする)

バッテリー温度監視

45 °C 上限

0 °C 下限

SNMP設定情報

名称: UPS1

電源切断予告時間: 180 Sec

Disk保護時間: 60 Sec

許容電圧(上限): 108 V

許容電圧(下限): 92 V

電源異常検出感度 (1:自動 2:低 3:中 4:高): 4

異常発生時のブザータイミング (1:電源障害 2:Low Battery 3:なし): 1

異常検出時のブザータイム: 0 Sec

自動バッテリーテストパターン (1:隔週 2:毎週 3:起動時 4:なし): 2

UPS設定情報

UPS型名: Smart-UPS 1500 RM

シリアル番号: AS0653110939

FW Rev.: 617.17.A

復電reboot時の最低充電率: 0 %

Low Battery検出後の動作可能時間: 120 Sec

UPS停止後のバッテリー放電時間: 0 Sec

情報の書き込みをSNMPで実行

③の時間を設定

[ESMPRO/AC GUI : オプション]

オプション

監視パラメータ | 投入/切断 | メッセージ通知 | ジョブ起動

連携機能1 | 連携機能2 | 自動運転情報 | 省電力 | その他

電源切断時のジョブ監視

ESMPRO/JO連携

ESMPRO/JMSS連携

クラスシステム連携

ARM3.0

サーバを同期制御しない

通信用IPアドレス: 172.16.1.255

通信用ポート番号: 4000

タイムアウト

あり | なし

タイムアウト時間: 3 分

②の時間を設定

OK | キャンセル | ヘルプ

クラスタシャットダウンにかかる所用時間の調べ方

クラスタシャットダウンに実際にかかる時間は、以下の手順によりユーザ環境にて実測する事が出来ます。

0) クラスタサーバのコンソールをログオンしておきます。

1) CLUSTERPROのマネージャ画面より、クラスタシャットダウンを起動します。

「ストップウォッチ：開始」

2) クラスタシャットダウンが実行されます。

3) ESMPRO/ACより「電源切断条件が成立しました....」といった、シャットダウンを開始する最初のメッセージがサーバコンソール上に表示されます。

「ストップウォッチ：停止」

4) OSのシャットダウンが実行されます。

5) サーバが 電源OFF あるいは リブートします。

上記の 1)～3) の時間が、クラスタシャットダウンの所要時間です。

9.2 制御端末が使用する共有ディスクの停電・復電時動作

(1)共有ディスクにて停電発生時

制御端末が使用する共有ディスクに通電しているUPSでのみ停電が発生した場合、「電源異常回復時にリブートする（制御端末からリブートする）」に設定していると、以下のような動作を行います。

共有ディスクに通電しているUPSの設定

電源装置

電源装置管理情報

連動装置の電源 冗長なし

IP address 172.16.1.3

SNMP コミュニティ名 public

説明 制御端末の共有ディスク用UPS

電源異常

電源異常確認時間 900 Sec Warm-UP 順位 1

Warm-UP 時間 0 Sec

電源異常回復時にリブートしない

電源異常回復時にリブートする（UPSによるリブート）

電源異常回復時にリブートする（制御端末からリブートする）

バッテリー温度監視 45 °C 上限

0 °C 下限

SNMP設定情報

名称 UPS3

電源切断予測時間 180 Sec

Disk保護時間 60 Sec

許容電圧(上限) 108 V

許容電圧(下限) 92 V

電源異常検出感度 (1:自動 2:低 3:中 4:高) 4

異常発生時のブザータイミング (1:電源障害 2:LowBattery 3:なし) 1

異常検出時のブザータイム 0 Sec

自動バッテリーテスト/リターン (2:隔週 3:毎週 4:起動時 5:なし) 2

UPS型名 Smart-UPS 1500 RM

シリアル番号 AS0431210940

FW Rev. 617.3 A

復電reboot時の最低充電率 0 %

LowBattery検出後の動作可能時間 120 Sec

UPS停止後のバッテリー放電時間 0 Sec

情報の上書きをSNMPで実行(S)

OK

キャンセル

UPSレポート

バッテリー交換日

冗長構成設定

iStorage連携

- ①制御端末が使用する共有ディスクで停電発生
- ②全ての制御端末にてクラスタシャットダウン・OSシャットダウン・電源OFFを行なう。
- ③全クラスタサーバ起動
起動後、制御端末が使用する共有ディスクの復電を待つ。
(この時点では共有ディスクへのアクセスができないため、クラスタ化したSSC関連サービスは稼動しません。)
- ④共有ディスク復電、起動。
- ⑤全ての制御端末においてクラスタシャットダウン・リブート。
- ⑥クラスタシステムの完全復旧。
(この時点から共有ディスクへのアクセスが可能になるため、クラスタ化したSSC関連サービスが稼動状態になることができます。)

(2)共有ディスクが複数台の場合

共有ディスクが複数台あり、クラスタシステムに停電が発生した場合、「電源異常回復時にリポートする（制御端末からリポートする）」に設定していると、以下のような動作を行ないます。

共有ディスクに通電しているUPSの設定

共有ディスクが複数台ある場合に、電源異常回復時に数字の低い順から起動します。

- ①制御端末が使用する共有ディスク（Warm-UP順位：3）で停電発生
- ②全クラスタサーバでクラスタシャットダウン・OSシャットダウン・電源OFFを行なう。
- ③共有ディスク電源OFF
- ④全クラスタサーバ起動
起動後、共有ディスクの復電を待つ。
（この時点では共有ディスクへのアクセスができないため、クラスタ化したSSC関連サービスは稼動しません。）
- ⑤共有ディスク起動。（Warm-UP順位：1、2の順で起動）
- ⑥共有ディスク（Warm-UP順位：3）復電。
- ⑦共有ディスク起動。（Warm-UP順位：4、5の順で起動）
- ⑧全てのクラスタサーバの再起動。
- ⑨クラスタシステムの完全復旧。
（この時点から共有ディスクへのアクセスが可能になるため、クラスタ化したSSC関連サービスが稼動状態になることができます。）

9.3 連動端末が使用する共有ディスクの停電・復電時動作

iStorage連携機能を使用しているシステムにおいて連動端末が使用する共有ディスクに通電しているUPSでのみ停電が発生した場合、「電源異常回復時にリブートする（制御端末からリブート）」に設定していると、以下のような動作を行ないます。

共有ディスクに通電しているUPSの設定

電源装置管理情報

連動装置の電源 冗長なし

IP address 172.16.1.4

SNMP コミュニティ名 public

説明 連動端末の共有ディスク用UPS

電源異常

電源異常確認時間 30 Sec Warm-UP 順位 1

Warm-UP 時間 0 Sec

電源異常回復時にリブートしない

電源異常回復時にリブートする (UPS) 以上リブート

電源異常回復時にリブートする (制御端末からリブートする)

バッテリー温度監視 55 °C 上限

0 °C 下限

SNMP設定情報

名称 UPS4

電源切断猶予時間 180 Sec

Disk保護時間 60 Sec

許容電圧(上限) 108 V

許容電圧(下限) 92 V

電源異常検出感度 (1:自動 2:低 3:中 4:高) 4

異常発生時のブザータイミング (1:電源障害 2:LowBattery 3:なし) 1

異常検出時のブザータイム 0 Sec

自動バッテリーテストパターン (1:隔週 2:毎週 3:毎週 4:起動時 5:なし) 2

情報の上書きを SNMPで実行

UPS型名 SMART-UPS 3000 RM

シリアル番号 QS0553210298

FW Rev. 92.15S.A

復電reboot時の最低充電率 0 %

LowBattery検出後の動作可能時間 120 Sec

UPS停止後のバッテリー放電時間 0 Sec

- ① 連動端末が使用するiStorageで停電発生
- ② 連動端末用のiStorageを使用する全ての連動端末にてOSシャットダウン・電源OFFを行なう。
- ③ すべての連動端末のUPSオフ確認後、制御端末が連動端末のiStorageに対してキャッシュフラッシュ指示
- ④ キャッシュフラッシュ完了後、制御端末がiStorageのUPSを即オフ。
- ⑤ iStorageの商用電源が復電したことを制御端末が確認後、制御端末がiStorageのUPSをオン。
- ⑥ 制御端末がiStorage装置と通信を行い、iStorage装置へのアクセスが可能な状態かどうかを確認。
- ⑦ iStorage装置へのアクセスが可能な状態となったことを確認すると、連動端末に対してWake ON LANを送信して連動端末を起動

10 iStorage 連携機能を使用した電源管理／自動運転について

ここでは、iStorage連携機能を使用した電源管理／自動運転について説明します。

10.1 停電発生時のシステム停止処理および復電後のシステム起動処理

＜停電発生時のシステム停止処理について＞

UPSが停電を検出すると、SSC/電源管理基本パックは一定時間停電状態が継続するのを待ち、その後に連動端末、連動端末が使用するiStorage装置、制御端末の順に停止処理を行います。制御端末は連動端末の停止処理が完了したことを確認すると、連動端末が使用する共有ディスクに対してフラッシュ処理の要求を出してiStorageのフラッシュ処理を実施させて停止処理を行います。最後に制御端末自身に対して停止処理を実施します。

※注意

停電発生時にSSC/電源管理基本パックによるシャットダウン処理を実施する場合は、制御端末が最後まで稼動しておく必要があります。制御端末が連動端末、および連動端末の共有ディスクよりも先にシャットダウンしてしまった場合、連動端末および連動端末が使用する共有ディスクの停止処理は実施されません。

＜復電後のシステム起動について＞

復電後にシステムを自動起動する／しないを選択することができます。

復電後にシステムを自動起動する設定で運用する場合、最初に制御端末が起動して、その次に制御端末が使用する共有ディスクが起動します。共有ディスク起動後は制御端末にて再起動が行われ、再起動完了後からクラスタサービスが稼動します。

その後は制御端末が連動端末の共有ディスク起動、連動端末の起動を順次行います。

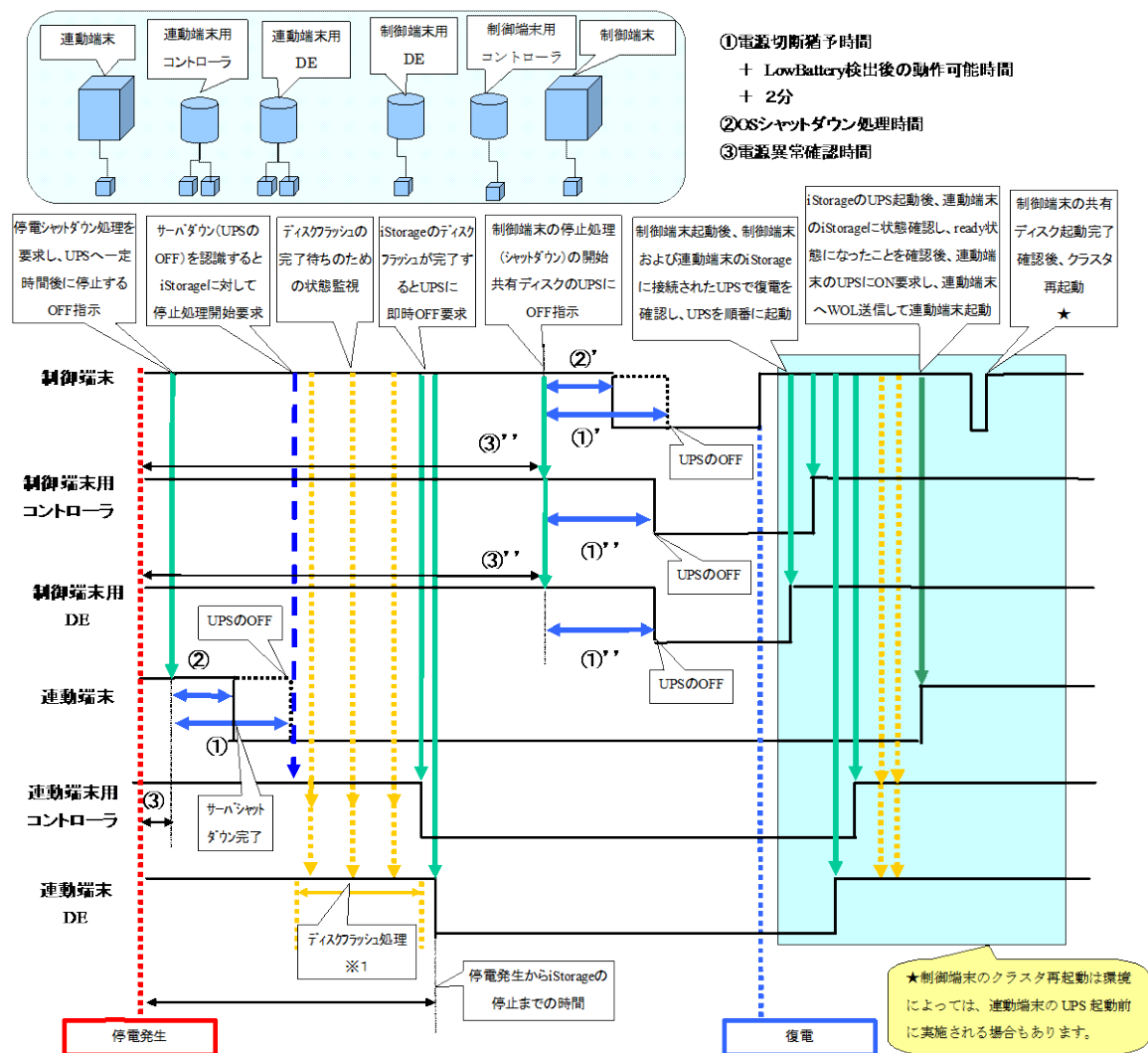
制御端末 → 制御端末の共有ディスク（制御端末が再起動）

→ 連動端末の共有ディスク → 連動端末

復電後もシステムを自動起動しない設定で運用する場合、システムの起動処理は手動オン（各UPS装置のボタン押下による手動起動）により実施する必要があります。

※注意

連動端末は、連動端末の共有ディスク起動完了後に起動させる必要があります。連動端末のUPSを手動起動する前に、必ず連動端末の共有ディスクへのアクセスが可能な状態になったのを確認した上で行ってください。



- ① 連動端末に接続した UPS（電源装置）の電源切断猶予時間 + LowBattery 検出後の動作可能時間 + 2分
- ①' 制御端末に接続した iStorage の UPS（連動装置）の電源切断猶予時間
- ①'' 制御端末の共有ディスクに接続した UPS（電源装置）の電源切断猶予時間 + LowBattery 検出後の動作可能時間 + 2分
- ② 連動端末のシャットダウン処理時間
- ②' 制御端末のシャットダウン処理時間
- ③ 連動端末の iStorage に接続した UPS（連動装置）の電源異常確認時間
- ③'' 制御端末の iStorage に接続した UPS（電源装置）の電源異常確認時間

■ 制御端末

- ・制御端末はiStorageの停止処理を実行するため、連動端末のiStorageへのフラッシュ処理に要する最大時間分以上の時間を設定しておく必要があります。
- ・通信不可状態のiStorageに対しては、フラッシュ要求を出してキャッシュフラッシュのタイムアウト時間（※1）待ってからUPSをOFFします。

復電後に自動起動をする設定にしていた場合、最初に制御端末のUPSが自動起動します。その後、制御端末のiStorageのUPSはAMCの電源装置画面にて設定されている「Warm-UP順位」に従って順次起動されます。制御端末のiStorageのUPSがすべて起動完了すると、制御端末ではクラスタ再起動が実施されます。

連動端末のiStorageについては、iStorageが接続されているすべてのUPSについて復電していることを制御端末が確認できたら、「Warm-UP順位」に従って順次起動されます。連動端末のiStorage装置がすべて起動完了し、iStorage装置がアクセス可能な状態になったことを制御端末が確認すると、制御端末は連動端末のUPSをオンして、連動端末を順次起動させます。

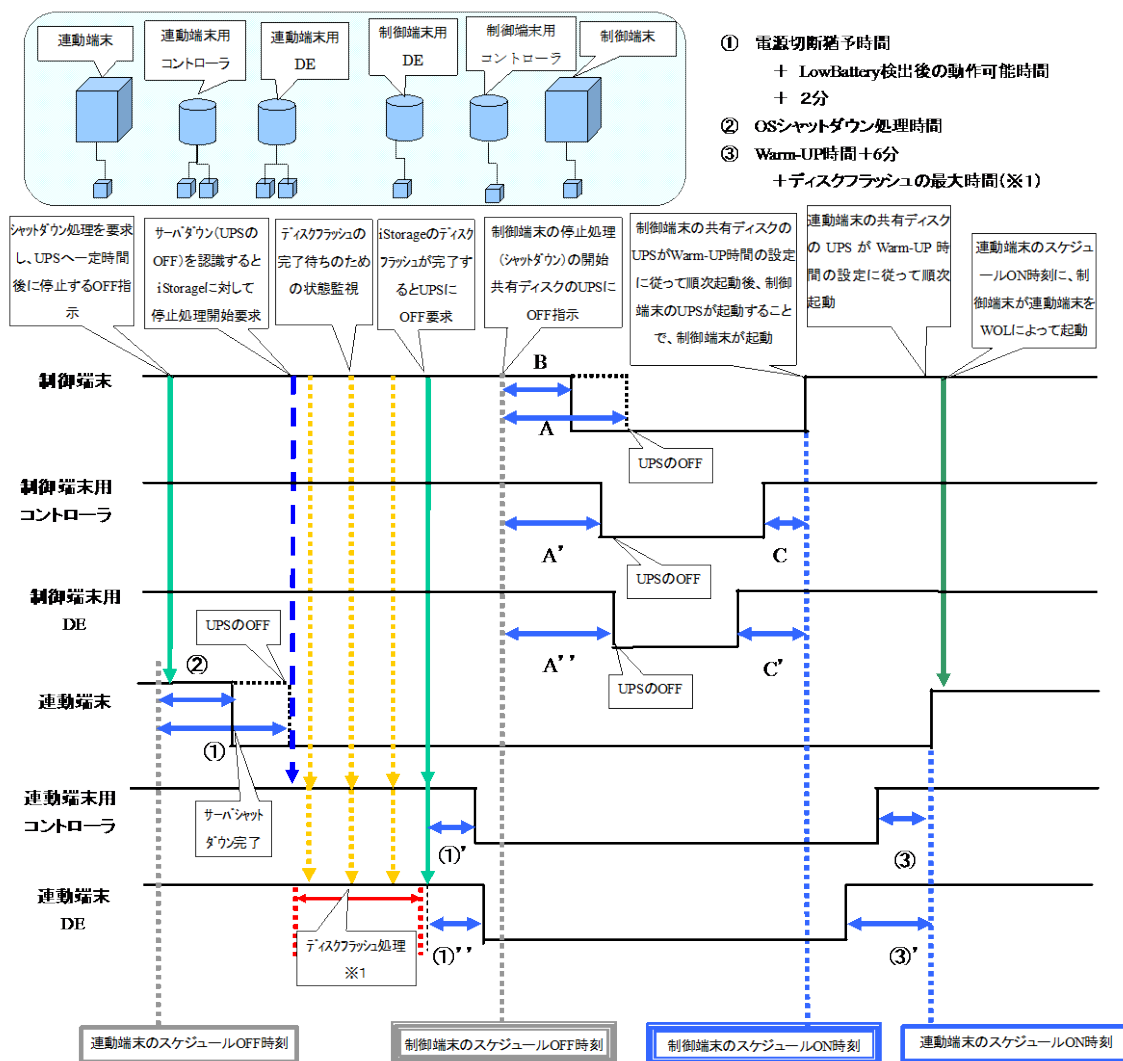
10.2 スケジュールによる自動運転

SSC/電源管理基本パックは、スケジュールによる自動運転機能も提供しております。SSC/電源管理基本パックによるスケジュールシャットダウン機能を利用すると、連動端末用のiStorage装置のシャットダウンを行い、ディスクにキャッシュデータを書き込むことができます。

また、OFF時刻とON時刻の間隔を1分にする、設定したサーバのスケジュールによるシャットダウンリブートも可能です。

※注意

サーバのスケジュールによるシャットダウンリブート実施時は、iStorageのオフ/オンおよびディスクにキャッシュデータを書き込む処理は実施されません。



- ① 連動端末に接続したUPS（電源装置）の電源切断猶予時間 + LowBattery検出後の動作可能時間 + 2分
 - ①' 連動端末用iStorageコントローラに接続したUPS（連動装置）の電源切断猶予時間 + LowBattery検出後の動作可能時間 + 2分
 - ①'' 連動端末用iStorage DEに接続したUPS（連動装置）の電源切断猶予時間 + LowBattery検出後の動作可能時間 + 2分
 - ② 連動端末のOSシャットダウン処理時間
 - ③ 連動端末のiStorageコントローラに接続したUPS（連動装置）のWarm-UP時間 + 6分 + キャッシュフラッシュの最大時間（※1）
 - ③' 連動端末のiStorage DEに接続したUPS（連動装置）のWarm-UP時間 + 6分 + キャッシュフラッシュの最大時間（※1）
-
- A 制御端末に接続したUPS（電源装置）の電源切断猶予時間 + LowBattery検出後の動作可能時間 + 2分
 - A' 制御端末に接続したUPS（電源装置）の電源切断猶予時間 + LowBattery検出後の動作可能時間 + 2分
 - A'' 制御端末に接続したUPS（電源装置）の電源切断猶予時間 + LowBattery検出後の動作可能時間 + 2分
 - B 制御端末のOSシャットダウン処理時間
 - C 制御端末のiStorageコントローラに接続したUPS（連動装置）のWarm-UP時間 + 6分
 - C' 制御端末のiStorage DEに接続したUPS（連動装置）のWarm-UP時間 + 6分

※1 iStorage連携におけるキャッシュフラッシュのタイムアウト時間について
 キャッシュフラッシュ処理を完了するまでの最大時間（キャッシュフラッシュのタイムアウト時間）については、使用するiStorage装置により異なる場合がありますので、詳細はiStorage装置の取扱説明書など関連ドキュメントを参照し、キャッシュフラッシュのために必要となる最大時間を必要に応じて設定してください。

また、SSC/電源管理基本パックのソフトウェア側で持つキャッシュフラッシュのタイムアウト時間のデフォルト値についても、バージョンによってデフォルト値が異なっております。

- SSC/電源管理基本パック Ver.2.1 : 5分
- SSC/電源管理基本パック Ver.1.0 : 20分

iStorage連携のキャッシュフラッシュのタイムアウト時間を変更するための手順については「6.7 iStorage連携設定」を参照してください。

動作のポイント

■iStorageのスケジュールの動作

- ・iStorageのスケジュールによる停止は、各連動端末に設定されたスケジュールに依存し、制御端末のスケジュールには依存しません。
- ・SSC/電源管理基本パックの設定において、連動端末のiStorage資源を利用する全ての連動端末がスケジュールOFF処理された場合にのみiStorageの切断処理が実行されます。

■ スケジュール設定

- ・ 連動端末のiStorageのスケジュールOFFは、制御端末ではなくiStorageの資源を利用する連動端末のスケジュールによって動作します。iStorageのスケジュールOFF後に制御端末もスケジュールOFFする場合、制御端末のスケジュールOFF時刻については連動端末のiStorage装置のフラッシュ処理完了後となる時刻を設定してください。
- ・ 連動端末のスケジュールOFFからONまでの時間が短い場合、ディスクフラッシュ処理が完了できない可能性があるため、連動端末のiStorageのOFF処理を行いません。

連動端末のiStorageのスケジュールをOFFにするスケジュールを作成するためには、連動端末のスケジュール作成時において以下の時間を設定しておく必要があります。

OFF時刻からON時刻までの間隔：①+ 1 0 分（内部処理時間）+③’

(設定例)

- ①の時間が420秒（電源切断猶予時間(180秒)+Low Battery検出後の動作可能時間(120秒)+ 2 分）
- ③’の時間が23分（Warm-UP時間(720秒)+6分+ディスクフラッシュの最大時間(5分)の場合)の連動端末のスケジュール

OFF時刻： 22:00

ON時刻： 22:48

設定した時刻に、システム停止／再開するためのスケジュール設定方法は、制御端末と連動端末により異なりますので、スケジュール運転を行う場合は各サーバにて個別にスケジュール設定を行ってください。

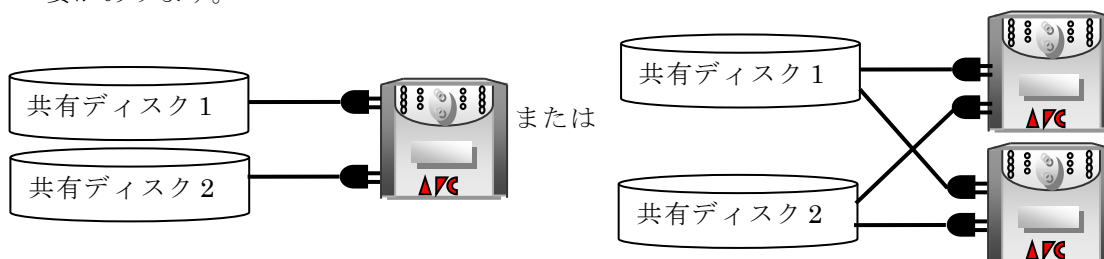
11 スクリプト作成の注意事項

SSC/電源管理基本パックではスクリプトの作成は不要です。

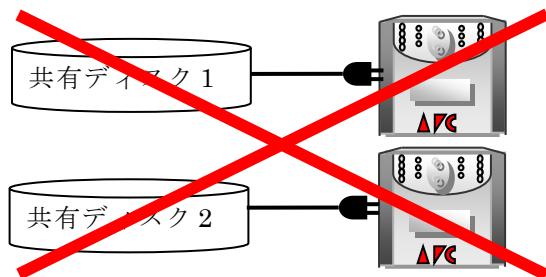
12 注意事項

- (1) SSC/電源管理基本パックをSSCの管理サーバごとに購入し、個別にインストールする必要があります。連動端末については、1ライセンス、10ライセンス、50ライセンスの追加ライセンスをご購入ください。
- (2) 全サーバ（制御端末／連動端末）の時刻を合わせてください。スケジュール運転の制御には、制御端末と連動端末のどちらの時計も利用します。制御端末と連動端末の時刻の誤差が大きい場合には、スケジュール運転が正常に動作しません。時刻補正にはNTPサーバの利用を推奨しますが、NTPサーバによる時刻補正がかかるタイミングが、スケジュール運転のON/OFF時刻に近い時刻にかからないようご注意ください。

- (3) 制御端末/連動端末には、ESMPRO/UPSManager、PowerChute Business Editionをインストールしないでください。
- (4) 1台のUPSに、クラスタサーバとクラスタ以外のサーバを共存させるマルチサーバ環境を構築した場合、クラスタマネージャからのシャットダウン操作は利用できません。シャットダウン操作を行うと、クラスタ以外のサーバはシャットダウンしないでUPSからの電源出力が停止されるため、システム障害を引き起こす可能性があります。
- (5) 連動端末が使用する共有ディスクの電源については、iStorage連携機能を使用しない場合、AMCの1つの「連動装置」グループ内に登録できる以下のような電源接続構成にする必要があります。



以下のように、共有ディスクの電源を異なるUPSに接続した電源構成については、AMCの1つの「連動装置」グループに登録できないため、未サポートとなります。



- (6) Windows Server 2008 R2およびWindows Server 2008、2003等のx64 Edition環境で動作する場合、CLUSTERPRO側にてESMPRO/ACと連携した動作が行われるようにするため、各クラスタサーバのコマンドラインより以下のコマンドを実行してください。

```
clpacmode enable
```

コマンド実行後は、Webブラウザを起動してCLUSTERPROのWebManagerに接続し、クラスタ停止/クラスタ開始操作を行い、設定内容を有効にしてください。

- (7) CLUSTERPRO Ver8.0 以前からの連携機能により、互換API (CLUSTERPRO Ver8.0 以前で使用可能であったAPI) を使用したCLUSTERPRO Xとの連携処理を行っています。そのため、CLUSTERPROのクラスタ名、サーバ名、グループ名は、CLUSTERPRO Ver8.0 の命名規則 (半角英数字で15文字以内) に従った設定をしてください。CLUSTERPRO Ver8.0の命名規則に従わなかった場合、ESMPRO/ACサービスはエラーとなり、正常に起動することができません。詳細は、「CLUSTERPRO X for Windows システム構築ガイド」を参照してください。

13 その他

- (1) CLUSTERPRO X1.0 を使用して連携動作させるためには、CLUSTERPRO X に内部 Ver9.02(アップデート管理番号:CPRO-XW010-01)以降の適用が必要です。
- (2) CLUSTERPRO Xを使用する場合、CLUSTERPRO 側の設定方法、留意事項等については、最新版の CLUSTERPRO X のスタートアップガイドを参照してください。